女學雜誌

第二百二十號目次

社説　國は猶ほ家の如し○多數女學校目下の欠點(下)
論説　讀書論(老川居士)
批評　浮城物語立案の始末○一致教會憲法規則信條並附錄○葉末集○對髑髏○奇男兒○一刹那○眞美人○トルストイ伯の新著
雜錄　新島襄先生未亡人を訪ふ(郁山人)○愛國と美術○義務○賤の身の果(サウジー原作)○革命は子供が文字書く似し○佛國の慈善家三婦人の傳○懸賞答文○きよめぬ庭
小説　うき世(七)
寄書　避暑地案内○思ひ得たるとども
開書　みね子の君に返す○交詢
時事　七月五日○今后○社會改良の問題○行政裁判所○新聞紙○女學生の歸省を送る○子守練習所○日本婦人○獨逸の女學○救濟記事○廢娼記事
女報　皇后陛下の御仁惠○○女官の寄贈金○婦女の欠乏○同志社看病婦學校○パーチル氏の北堂○女子新聞記者

He who is impatient with events is impatient with God.—Dr. Upham.

鐘が淵紡績會社實況

新嶋襄夫人を訪

葉末集一讀の評

改革は文字かく如し

七月五日發兌　第二百二十號　一冊定價六錢

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

The Woman's Magazine.

(JOGAKU ZASSHI.)

No. 220. July, 5th, 1890.

第二百二十九號目次

EDITORIAL:--A Word in regard to some Girls' Schools of the Present Day. (concluded).

LEADING ARTICLES:--How to Read.

CRITICAL NOTES:--The Plot of the "Ukishiro monogatari." The Constitution of the "Itchi kyokwai." A Collection of Rohan's Stories. Count Jolstoi's New Book.

MISCELLANEOUS:--An Interview with Mrs. Niijima, the Widow of the Late Dr. Niijima. Patriotism and Fine Art. Duty. "The Pauper's Deathbed." Revolution, Compared to a Child's Attempt at Copying. Three Philanthropic Women of France. The Prize-essay. Humorous.

NOVEL: "Ukiyo."

OPEN LETTERS.

CONTRIBUTED ARTICLES.

NOTES AND NEWS.

CONCERNING WOMEN.

社説 三日以前、婦人の勢力○目下女子教育の欠點

論説 蓄妾（一夫方舍野主人（二））賣奴の弊風再燃せんとするを防ぐべし（大江卓）

批評 高橋島清氏の報伜○山縣伯に與ふる書○新著百種）江戸むらさき

雜錄 養育院を見舞ふの記 犬ころしの情けなきを憫れむ（秋のこみち）跡見花蹊女史を訪ふの記（生野ふみ）○懸賞文○さくらめ記

小説 うき世（六）

寄書 讀書指南案内（K、M、生）

開書 清水豐女史に與ふ（青井榮子）浮世の筆者に與ふ。究問

時事 三日以前の顛狂者○新聞紙上の除符、貧民學校○婦人矯風會教育○夏季學校づく、新聞記社校長に語る○押川方義氏○明治學院 照純琴習 醫籍、藝妓代女學生、救濟記事、輕拐記事

女報 貴婦人の教諭 慈善音樂會（婦人矯風會○工女の不潔け○今治婦人會（ルーマニヤ女皇（ファバイ女史

Women in Japan.

I.

The [illegible] at K[illegible] [illegible] 1817 [illegible] the spinning [illegible]. The [illegible] 15 to 20 sen per day. The [illegible] able, employees are taught something of reading and writing and [illegible] given especially for their advantage. Rumours were afloat concerning the [illegible] the employees [illegible] but our recent visit to the establishment proved them to be utterly false. Particular accounts will be found in this no.

II.

An interview with Mrs. Niijima (the widow of the late Dr. Niijima) is to be found in this no. The lady is reported to be in ill health, but she keeps up a close connection with the Doshisha.

III.

A [illegible] nurse has been opened at [illegible] the W. C. J. U.

IV.

Mr. [illegible] at [illegible] has [illegible].

V.

Dr. S[illegible]'s lecture on "Woman's Philanthropy" will appear in the next no. of the magazine. The same gentleman has been the dispenser of 1 yen to 100 yen [illegible] 3 times a month.

Digitized by Google

Original from CORNELL UNIVERSITY

女學雜誌　第二百二十號　明治二十三年七月五日發兌

社説

國は猶ほ家の如し

飛影○惑菩。

漠々たる大平洋の上に一つの巨艦浮ぶ、首らは支那朝鮮に向ひ、尾は魯士亞に接す、四千万の人乘客たり、艦主至尊恭々しく統率し、百官百將謹しみて舵を操とる、日本國は即はち此の巨艦に似たり。

吾國未だ嘗て他邦に屈從せず、吾民未だ嘗て離叛分裂せず、古來帝室を尊崇して同もに一國の臣たり、未だ嘗て一日も同胞同輩の因緣を失なはざるなり、吾等は祖先以來共に與に東天和地の間だに居住して万古、所ろを異にせしとなし、願はくは永劫亦た手を携へて往かん、吾等は長しなへに同舟に乘る、歡樂悲哀双つながら分たん、斯國は猶ほ家の如し。

見よ亞細亞の全洲を、堯舜の德すでに消え、ゾロアステルの學空しく散り、佛陀の悟早く迷よひ、クリストの光徒らに西方に向つて輝やぐ、埃及の文化は夙とに西漸し、バビロンの高塔は天に達らずして崩け、フヒニシア、カーセーヂの富は煙の如く失せ、ヒーブリウの文、ペルシアの武、今の世に輝やくに足らず、而して十九世期の黄色人種は寧しろ白人の奴隷たり、支那は何如に、印度は何如に、朝鮮は何如に、他數ふるなきの列國は其名すら稱へられず、アラビアの砂漠と共に寞なし、人なし、生氣なし。

夫れ日本は亞細亞全洲の率先者にあらずや、東天旭光の登るところ、日章を掲げて全洲の眠を覺すは、夫れ日本にあらずして何にぞ、クック全世界を周遊し、米國に歸りて揚言す、日本は東洋の船首なり、其舵の運轉何如んは亞細亞全洲を進ましめ、退かしめ、浮ましめ、沈ましむと。

左れば吾等は最と樂しきの家に住ふのみならず亦極めて重やかなる責任を負へり、あゝ吾等には今ま夷狄を殺さんとするの武魂なし、亦外人を讎視するの愛國心はなし、左れど白人が暴力を用ひて他の人種を侵さんとするを見ては、苟くも安居す可らず、四海は同一人類にして上下貴賤あるなし、今や人間一族の塗炭に困し怨を飲みて死せんとする、もしくは長夜の眠永々に覺めず天地の間に居て空しく朽死せんとするもの億々あるを見る、安んぞ努力せざるべき、日本人民一日早く覺めたり矣、吾等先づ其任に當らずんばある可らず。思へらく、われ日本人の天職は頗ぶる重し、苟くも局促して穴に入る可らず、須らく論慎天を貫れて敢為其務を盡すべし、

吾等は東方に光を發ち、東洲の荒地を拓らき、東洋に森を林立せしめ、西國の文物を移植して東方固有の哲學、美術、文明、氣風を特成せずんばある可らず、此等の事皆なわれ日本人が望むる所ろの天職なり。

然れば同胞よ！、相爭ふ勿れ、能く協和して共に此大なる事を成さん。

當撰の議員は忠實に任を盡せ、不當撰の人は野に反りて靜かに務めを盡せ、出るものは命を受しなり、退くものは命を待つ也、兄は路に當る、弟は安んぞ怨思せざらん、願はくは相助けん、而して官に在る者、家を作る者、子孫を教ふる者、亦た共に相ひ和し、努力して國家に盡さん。

貧しきの人も同胞なり、既に臨み同胞の人衰ろふ何んぞ之を救濟せん、舟を行り同胞の水夫弱はる何んぞ之を水に投げん、同胞の人將に餓死せんとす、安んぞ僅かに經濟士となり算術家となりて冷々之を傍看しつゝ過さん、吾等は同胞の爲めに誠を盡すを務とするもの也。

夫れ國は猶ほ家の如し、家相和せずんば、男子出でゝ何事をも爲さず、家の治まらずば入出間隙の如し、家人同心なら、ずんば一族の榮え長く望みなし、國は猶ほ家の如し、而して日本國は古へよりの一家なり、吾等安んぞ一家族人の爲すが如くに爲さずしてあるべき。

多數女學校目下の欠點（下）

最后に言ふべきは女學生寄宿の事あり。夫れ女學の不評判なるは今に始めぬことにして、世上すでに其定論あるに似たり、然れども此評判は果して尤ともなる批評に出るや否や、扨て之を尤もありとするも更に之を改良するの見込なきや否や。苟くも不當の批判なりとせば、吾人は之を辯ぜざる可らず、苟くも改良の見込ありとせば、吾人は之を勵めざる可らず、苟くも此儘にして放任するとの大害惡ありと知らば、吾人は説明して之を廣く天下に訴たへざる可らず。

凡そ寄合なる者の仕組には必ず一利一害併隨せざるを得ず。所云る利とは、教場に於て及ぼし得がたきの感化を此處に於て及ぼすにあり、所云る害とは教場に於て起るまじき惡習を此處に於て醸もすにあり。即はち、教場に於ては、教師壇上に儼然として立ち、生徒机案に肅然として坐す、彼は互ひ行儀を謹まざるを得ず、此際に於て自然淑女ならんとは固より在るまじきもの也、然れども、寄合に於ては起居坐臥自由にして、縦し戲ぶとも雜談すとも踞坐かくとも構はるゝことなし、特に人は一人あれば反つて温和しきものあれども、同類多き

時には互ひに增長して亂暴をするの癖を生ずるものあり、即はち塾舍は一坪一人を容れて、一室に八九人雜然として同居す、勢ほひ風儀の惡しくあることなくんばあらず、之を熟舍に於て免かる可らざるの一害となす。左れど敎塲に於て敎ゆる所ろは日に二三時間に過ぎず、而も大率ね事物の意義論理を敎授するに偏して、專ばらに智育を旨とするに至る、所云る感化の氣溫たかにして知らざるの間に人を化し、德風薰して情性自づからに伸ぶるの境界は寧しろ此處ろにあることなし、左れば、書生に道理一偏の敎授を與へて、只だ彼が頭まを肥やさんとのみを心掛るときは、敎塲のみにて宜し、若し之に德育を施こし彼が習慣を改造し彼が感想を誘導せんと欲するに於ては、必らずや熟舍に於て不知不識の間だに人を導びくの制度あくんばある可らず、之を熟舍特有の一利となす、即はち敎塲に於て决して得らるまじきもの也。

左れば熟舍の長所は、人を薰化するにあり、其短所は人を惡染するにあり。或は人を善くするものとあり、或は人を惡しくするものとなる、善惡の果天地の隔たるが如しと云へども、共に之れ熟舍なるものに人の習慣を養成し所云る人物の型を造るの勢力あるに因ての故あり。諺に云く、藥となるものは亦た毒となると、熟舍は之を善用すれば學校の精髓たらん、もし之を惡用すれば敎育の破壊者たらん。

而して熟舍に於て誤まつて養成する惡弊風に關し、男性に對しては世上彼此と言ふもの至て少なし、但だ女性に對しては頗ぶる之を痛論す、云はく、風儀あしゝ、云はく、禮儀なし、云はく、女らしくなし、と。抑そも今の熟舍にもし此類の弊風ありとせば、女熟に之れあると共に亦た男熟にも之れあるべし、然れども男書生の亂暴なることには、日本人が昔しより慣れたる所ろ若しくは自から經驗したる所ろあるを以て、左程に驚ろくことなし、但だ女學生の多少亂暴ならんとするに至りては、日本開闢以來此の邦人が始めて見聞する所ろなるにより、格外に驚ろくことあり、於此乎、男熟に對するの苦情は寂として聞えず、女熟に對するの小言は太陽の日毎に來るが如く明らかに來る、若し今の女熟が紳女を造り出さずと云はゞ、今の男熟も亦た紳士を造り得まじきものなり、左れど其偏頗の僻事は今俗に對して言ふも効なきのみ。

今の女學生が亂暴なりと云ふは、抑そも何人に比較して言ふの事か。西洋人に比較しての事か、西洋人の娘等に比較するどきは今の日本の女學生は宛から姫の如し、所云る亂暴の度な

三

かくに及ぶべくもあらざる也。然らば昔しの野蠻に比較しての事か、而しくも然らば此は無益の事なるべし。抑そも今の日本男子は口に自由々々と叫びて、天皇陛下大權の一部を得んとしたり、此男子を昔しの男子に比ぶれば余程の相違あるにあらずや、此相違を目して今の男子は昔しよりも亂暴となれりと云ふべき乎、階級上下を亂さざる所ろ、平和を保せざる所ろ、お辭儀の少なき所ろ、口上の粗暴なる所ろ、たまわる所ろ、急がくする所ろ、進み昔しのならひに倣ふべくもあらず、然れども直ちに之を目して亂暴となれりと云ふことを得べき乎。之を同じく、今の女學生は昔しの如く無言にて居ることなし、隨分論ずるときには論ずるなり、又昔しの如く一間も出るけぬと云ふことなし、時には競爭もなし、ボートも漕ぎ、體操もなし、擊劍をも仕合ふ也、又昔しの如くヲヂ〱とし、ピク〱とし、ブル〱とし、話すにも、動くにも、進むにも、萬事人によりて決するが如きの弊あるなし、隨分に活潑となれり、而して此等を目し直ちに亂暴となれりと云ふことを得べき乎。鳥の籠にあるや、却つて靜か也、然れども彼が天性つねに靜かなるにはあらじ、寧しろ之れ籠の中にあるがゆへなるべし、左れば一たん戸開かれて自由に飛び出て、樹梢天空に翺翔するや、其態如何にも活潑なり、此時に當りて鳥類はち亂暴となれりと云ふことを得べき乎。

故に吾人は勿論一概に今の女學生は亂暴ありと云ふとも直ぐさま然りと同意することを得ず、たとひ斯々の如く亂暴なり、見らるゝ如く亂暴なり、昔しの娘、私したちの若い時に比べては斯々に相違するなりと言はるゝとも、大丈夫にて直樣に同意することあたはず、然れども吾人が理想に隨がひて今の女學生を見ても、尚は滿足しがたき所ろ少なしとせず、而して其滿足しがたき所ろは多く女學の弊風より來るとも思はるゝとあり、故に亦た幾分かは世人に同じて今の女學に對し反對する所あらざるを得ず。

昔しに於ては女學なるものを見たることなし、然れども先づ之に類似したるものを求むれば、御殿女中の部屋の如きものか、吾人は其の部屋と今の女學とを以て全く同じきものなりと言はず、但だ其の女の集まりたるの點に於て相似たる所ろ多しと云ふ也、而して支那人は女三人相集まるときは姦ましと云へりしが、總じて女性の集合し居るところには、一種異樣の弊風を出ずること往々にして之れ有り、邪推も生ずべし、猜忌も生ずべし、恨みも生ずべし、批評も生ずべし、雜言も生ずべし、而して此等種々のものは男學にも亦之れ有りと云ど

男塾のは自づから淡泊にして一時に激發し縮然として治まると喩へば夏の雷鳴に似たり、女塾のはジミ〳〵としツク〳〵として梅雨の如く、日に〳〵鬱氣を增して久しく晴れざるに至りては困苦莫大なり、之を以て塾中常に太平和ありと云ふことを得ず反つて終始不平なるが故に隨がつて樣々の惡風を生ず、此に於てか塾生は、意地の惡るき姑あるによりて根性曲りたる嫁の如く、極めて感服しがたきの新婦人とはなる也。啻に之のみならず、尋常の塾舍に於ては、女生、朝たの鐘鳴るとき、止むを得ず眠り乍らに起き、たゞ取締に叱らるゝが爲めに言ひ譯の掃除を爲す、斯て校婢校僕が用意したる食膳に就き、勝手氣儘に食ひ荒し、散々に不平をこぼし、賄方に難題を言ひ掛け、月三圓の月俸を拂ひて何程か御馳走あるべきかを勘辨せず、たゞ口に適はぬと云ふことによりて我儘を言ふ、而して三度の食事の間だは、本を讀むとて、復讀するとぞにして、其上に餘暇あるときは寢轉んでお話しをするか、もたれ掛りて風評を仕合ふに過ぎず、洗濯もせず、繼も當てず、小遣帳もつけず、預算表も造らず、况んや新衣を調ふると、食物を料理するとなどに至りては何等の實驗も爲さず、亦爲さんとせざるもの少なしとせず、女塾の弊此に於て殆んど極まると云ふべし。

吾人は今の女塾を目して皆な如此くなりと云ふに非ず、然れども其尤とも甚しきものに就て之を評すれば、實に幾分かは之に近似したるの弊風なしとしも言ふ能はざる也。

如此き女塾に於て教育せられたる人こそ實に不憫なれ、彼女が學校を卒業したる時は、譬へば女中が御殿を下りたる時の如けん、多少言葉付は利巧になり、幾分の學文も出來、一見して甚はだ賢して氣に見ゆるならんと云へども、彼女は實に飯を炊くとも、薪を燃やすとも、衣物を縫ふとも、世上一般の交際を爲すとも知らざる也、斯る女學生はホームの爲めに用ひて何の功益もなし。

夫れ今の塾舍は如此き女學生のみを養成するの場處なりや、果して然らば常に之を全廢すべし、之を置くに何の利あらん、然れども今の塾舍は皆必らずしも如此くなるにあらず、而して今に於て之を設け置くの必要別に存するとある也。

蓋し今は女界に於ける革命の時期にして、万づの女事其根本より改まらんとす、たとへば、女子修身の覺悟、もしくは女藝修練の學問などの如き、共に皆古へに全反するの趣きあり。たゞ一つの家を治むるにも、交際の仕風、料理の調へ方、下

婢の使ひ樣、良人に對するの心得、子供を養育するの覺悟など皆な昔しへに異なる、去れば此ども進步したる女學校たらんものは、啻に其女學生に學文を敎ゆるのみならず、其精神及び其習慣をも變へて、今の新らしきに就かしめずんばある可らず、此に於てか之を敎場に於てのみ敎ゆるは猶は足らざる所ろあり、更に之を寄宿舍に入れて日夜女學の新風俗に化せしむることを謀らざる可らず、苟くも然らず敎場に於ては尤とも開化したる學問を聞き、家に歸りては依然舊時代の家政を實行すると、假せば敎場に於て高尚なる議論の理學を研究し乍ら、家に於ては炭に水をかけて指よろしと賞讚する如きとわらんには、一日之を温ためて十日之を冷やし、十日之を拔きて百日之を拔くに異ならず、敎育の功果毫末もなし、故に今の日本男子日に文明に進み之に伴隨すべき女性の依り遙かに後るゝに當りて、一日も早く之を進ましめ、他の開化に同行せしめんと欲するには、啻に女學生に學理を敎ゆるに止まらず、之を完全なる寄宿舍に入れて尤とも進步したる良風俗の中に化醇せしめずんばある可らず、之れ今に於て特に完全なる女學を切要するの由縁なり。

なれば吾人は尤とも切に女學の必要を感ず、故に可成く女學をして完全ならしめんことを欲す、而して細かに今の寄宿舍を監みるときは幾多少の遺憾なくんばあらず、抑そも今の寄宿舍は此上に改良するの餘地なき乎、もしくは改良するの方法なき乎、吾人思へらく猶ほはなはだ多し。

啻に女生を一ヶ處に雜集合宿せしめ、恰かも折助の寄合の如く、御殿女中の部屋の如く、市の裏の長屋住居の如く、勸工場内の小店の如く、多くの女生を一の處に集め置くとは得策にあらず、之れ宜しく一に改めざる可らず。寄宿舍内は一つのホームの如くにし、一室内の女生は家族の如くし、喜樂悲哀を相分ちて同情同感の念に切ならしめざる可らず、然るに今の如くたゞ假に旅寄り暫らく同に下宿するとなふの趣きあらしめては、敢て能く此の實際を生ずることある可らず、之れ第二に改むべき點なり。女生の多數は後に必らず家を治むるの主婦となるなり、故に料理裁縫の事は言ふ迄もなく、部屋の飾る心得、客をもてなすの方式等をも學ばざる可らず、然るに今の寄宿舍の仕組にては、是等の事を敎ゆるに甚だ不自由多からずんばある可らず、之れ第三に改むべき點なり。吾人思ふに此等の諸點を改良して倘且つ女學の眞功德を發揚するには、吾人が年來に主張する所ろの小舍主義、即はち數人を一軒

に同居せしめて、軒々別に相併び、初めより一の大ひなる塾宅を設けざるの仕組即はち是れのみと確信す、吾人は所々の塾舍の有樣を聞く毎にいよ〳〵此の小舍主義の最好最良なるを信じ、再たび四方に訴たへて必らず此の主義の實用せられんことを熱望すと云ふ。

以上、躰操の事、女禮の事、塾舍の事は、目下の女子教育法に於ける三大欠點なりとす、他に尙ほ大ひに憂ふべきもの少なきにあらずと云へども、夫は世人すでに論じ、志あるもの亦すでに注意したり、たゞ此等三事の欠點に付きては世に未だ痛論するものあらず亦心付ける人の甚だ稀なるべければ、吾人敢て隗より始め、暴言愚考を吐露して、大方の淸聽を汚く、若し夫れ何如なる方法によりて此の三事を施行すべきやの問題に付きては、別號の紙上更めて論述する所あるべし。

世の中は空しきものとあらむとぞ
この照る月は滿ちかけしける。

世の中を何にたとへんあさびらき
こぎにし船のあとなきがごと。

論説

讀書論

老川居士

書を讀む何の要ぞ、古より書あること幾万千卷、之を讀みし者幾万千人、之を讀まざりし者も亦幾万千人なり之を讀みしは何の得ぞ、之を讀まざりしは何の失ぞ、讀みし者世に效ありしとせば讀まざりし者も亦效ありしなり讀まざりし者世に益なかりしとせば讀みし者も亦益なかりしなり、されば世の中には自己の姓名すら書く能はずして能く「マグナカータ」の一定約終に英民自由の大根柱を建てたる哲人もあり讀書者にして却て迂濶となり腐儒となり書物箱となりて世に益する所少なき者も多く不讀書者にして能く大事を理し大難を決し眞の道を行いて眞の名を千載に赫々たらしめし者亦少からず吾人今一とたび此の如きに想ひ及ばせば方に瞭然として讀書の哲人傑士に取りて些々たるを知るあり蓋し讀書には自ら讀書の目的あり素より是れ讀書のみの目的に非ずと雖も抑も讀書によりて達すると甚だ便あり甚だ適なり故に若し之にして別に天禀の才量により或は他の方略によりて達するを得る哲人傑士たらば讀書亦其人に要なからん唯吾人が日夕孜々として書

を讀む者蓋し又此大哲人大傑士たる能はざるが故のみ若し夫れ彼等傍の如き書物箱の如きに至りては此目的を知らず此目的を誤まり五里霧中東西を辨ずるなく徒らに半途の暗黒に彷徨し居る者に外あらざるなり。

何をか讀書の目的と云ふ之を解せんには先づ讀書の意義より說かざるべからず蓋し書とは他人の意見を錄せる者なり論文說文は固よりのこと、記事と云ひ叙事と云ふも亦是一種の意見たるの外ならず、されば讀書とは他人の意見を讀むと云ふなり抑も他人の意見を讀むは何の爲ぞ即ち讀書の目的は何くにあるぞ曰く他なし雖他人の意見を知らんが爲なるのみ然らば直ちに他人の意見を知るは果に何の爲か不思議にも世皆彼を知り此に至りては未だ多く考へざる者に似たり思ふに是こそ彼の著書を作り書物館を作る所以にて、人若し此考なくんば讀み書を讀まざるに若かざるなり吾人自ら思ふに他人の意見を知るは蓋し自己の意見を正く作らんが爲なるべし若し夫れ自己に成るの意見あらんか今他人の意見を知りて之を我に比較し若し彼にして是ならば我を改めて是となし正に就くと從來の卑きに就くが如くなるべし若し又我に未だ意見あらざるか須く他人の意見を取り之を我本心に投じ一案一考して以て自己の意見を作るべし凡そ我意見の有と無とに關せず吾人が他人の意見を知るは蓋し單に知る爲に知るに非ずして別に自己の意見を正く作らんが爲に知るなり抑も自己の意見は何の必要ありて正く作るべきか是亦此に一考せざるべからず蓋是讀書の最終目的にして此目的ありて書を讀むに非れば書を讀むも亦唯一種の遊戲のみ何ぞや曰く己の意見を正く作るは己の行爲を正く作さんが爲なると是なり彼の一篇地理の書を讀み植物の學を研ふるが如き一往は些も身に緣なきに似たり然れども若し深く詮究し來れば亦是人間世に立ちて己を正くし道を行ふ所以の者に外ならず是蓋し讀書の眞目的なり是讀書の使なり所なる所以なり彼の碌々乎碌々書を讀むも絕えて己の意見を作るなく己の意見を作るも絕えて己の行爲を正くするなきが如き者皆是共に與讀書を論ずるに足る者ならんや。

讀書の目的にして己に此の如しとせば吾人は更に讀書の方法に就きて讀書者の注意を乞はざるべからざる者甚だ多し曰く讀書者は

一）己を高くせざるべからず　凡そ人の文を批評せんと欲する者は先づ己をして其人より一段高からざる可らず今讀書にして已に自己の意見を作るにありとせば是實一種の批評ならざ

るを得す已に批評なり豈妄に其書を崇拜し之を金科玉條とし低頭平身して讀み去るべけんや若嚴く之を云はゝ吾人は欠點を見ん爲に讀書すと云ふも可なり校閲せん爲に讀書すと云ふも可なり吾人須く書を讀むべくして書に讀まるべからず須く書を奴隷とすべくして書の奴隷となるべからす若夫初より深く其書を信じて之を讀むが如くんば我已に書中の囚人となれるなり孟子曰く悉信書者不加無書と蓋し亦是の類のみ。

(二)謹愼なるべし　己を持する固より高かるべし然れども倨傲放慢其書を輕んじ其書を蔑にするが如きに至りては是亦寧ろ其書を讀まざるに加かざるなり先年我郷の一碩儒常に書を携ふるに先づ其手を淸め之を置くに直ちに疊の上に於てせざる者あり吾人今素より世人に向て此の如きまで謹愼あれよと云ふに非ず然れどもよし此の如くならずとも又此の如きに近きほどの謹愼恭敬ありて書を讀む常に金剛を「ブラジル」川砂中に搜すが如き思あるに非んば其書の眞假決して探知し得らるべき者に非と信ず能く思へ書を讀むは已に己の意見を正くし己の行爲を正くせんが爲なるに非ずや然れば是聖事なり是神事なり妄に面白半分的、枕頭縱横的に讀み去り讀み來るが如きは決して此目的を達する所以の道に非るなり且又何れの書と雖ども初より直ちに面白味を感ずるとは少なかるべく其終に至妙酣然の眞境に至る迄には必ず一たびは苦楚困艱の難越を經ざるを得ざるは當然なり吾人若夫此辛抱の心なからんかかゝるときには一たび卷を手にするも忽ち之を擲ち去り此を讀むかと思へば忽ち彼を讀み漸く安に就き漸く苦を忘れ唯淺薄浮流偸安に彼れ此れと涉獵し終らんのみ其害あると決して書物蟲にして止む者の比に非ず。

(三)精密の考慮を要す　唯是驟雨の颯然として一過するが如く跡も無く行衞も知れざる讀書は決して由て以て己の意見を作るを得る者に非ず若夫眞に之を得んとせんには一去一來往きつ戻りつ精密に周到に其書の上に考慮することを要す之に付て先づ吾人の念頭に浮び出づるとは今多く讀まんより寧ろ深く讀むべきと是なり蓋し學識の必用は讀書の分量に非して其運用の慣熟にあり若徒らに汎濫浮游なるのみにして別に完全周密あるとなくんば讀書亦何の實用にか適せんや、されば「フランシス、ホーテル」の如きは自ら規則を定めて一件の事を恒心勉學し徹底其れを理解するに至らざれば決して他の一件に移ずとし又自ら數部の書を以て限となし其他順次なく涉獵するとを以て痛戒とせりと云ふ又「ブライトン」の「ロベルトソン」

Digitized by Google
Original from CORNELL UNIVERSITY

の如きも一時に精神の書を読は心思を弱くせしむる者にして其閑暇に余る幾許もなし読書の散漫は實に懶惰中の最も甚だしき者なりと云へり先哲の言行已に此の如し吾人豈妄に深く読まずして多く読べけんや用捨からずして散漫なるべけんや盖し之を為すには書を撰むこと必要なり凡そ世の中廣く読まるる所の書は殆ど限なく読む所の年月却て限あり有限に由て無限を読み得に其無限もあり來る深を要し散漫より起る弊害を要すとせば必ず其中より無用を去て有用を取らざるを得ず有用の中も猶無用に近き者ありて無用に適き者を取らざるを得ず吾人一たび省へて此に至り我ら世の所謂稗史小説などを見れば則ちどして其實は有用なる者少くして無用なる者多く全く無用ならざるも亦寧ろ無用に近き者たるを知る嗚呼吾人又何の暇ありてか此稗史小説の類に耽溺せんや吾人が愈怪を失ひ其心を消し去る者皆にもくは之よりす、吾人次に更に云ふ其有用の中にても猶作者の巧拙によりて書を撰むべきことを、たとひ其書本來有用に属する者なりとするも其作者にして已に小たらば劣たらば吾人不知不識の間に此小劣の意見に染化ならるヽ恐なしとせず世の作者中には随分羊頭を掛けて狗肉を賣の類少きに非ず誤りて唯利の為にし名の為にする作者に附する如くんば實に読書者の大災なり詮し去り詮し來る世の中廣しと雖も眞に読むべき所の書は唯纔に數巻あるのみ然れども吾人若し精密に周到に此數巻を誦まば其益豈汎濫讀書者の上幾千倍のみならんや。

人若し上の如き目的を持し上の如き注意を携へて書を読まんか大才なしと雖も猶能く眞の道を行き眞の事を成すを得べし況や天凛別に大器量あり大識見ある英國自由の大哲人の如き者に於てをや若夫之に反して此の如きの目的なく此の如きの注意なからんか吾人恐くは読書の益ある寧ろ失ふるを見ざるべからず殆ど今日の読書者々に之を熟に充たし肝に銘ず可なり

批評

浮城物語立案の始末

讀者諸君は小説の筆記を読む、必らずしも其小説の詳に於て微悉すとおはず、但だ君が何事にも用心深きとを美とす、夫れ人情を寫すに解剖家が四肢を解剖するが如くあるは難しからず、之を簡略にせんとする事頗ぶる宜し、然れども簡略の文字には

餘情餘韻あらずんば亦た妙を得たりとす可らず、所謂る龍渓君の文はサッシエスチーブなりしや否や、若し簡潔にして更に想像に富と云はゞ、是れ近時の至文なり。

一致教會憲法規則信條並附録

本年末の大會にて議決すべき改正案を落手す、精讀の上にあらざれば細評するとかたし、左れど日本人は十七才にて國民とあり、又た信仰あるものは何才にても教會に入るとを得るに、十八才に至らざれば教會議事の投票權なしと云ひ、又長老執事は男子に限り、別に女執事を置くと云へども之に按手禮を授けずと定むるが如きは、抑そも何等必要のありての事か、靈海にして若し自由あらずば抑も何れの處ろにか平等を得ん、一致教會が組合教會に合併せんと申し出でたる時には餘程平民主義ありき、然るに合併出來ざるによりて乍ち貴族主義に反るべきか、吾人は少なくとも彼の合併案の儘に止まらんとを熱望するもの也。

葉末集

濱　染　子

識見の是非は言はず、兎に角一箇の意見を斷信して其理想を小説に描寫するもの、目下二葉亭と露伴氏の二君あり、一は懐疑者にして冷々世を睨まへ、一は禪識家にして悟外世上を定觀す、趣きを異にすと云へども意の剛わき所ろ一也、われ此頃葉末集を讀み、露伴氏の奇骨に感ず、

對髑髏

筆者淫あらず故に淫を寫すも風趣極めて高し、喩へば大悟したる娼婦に似たり、形骸猥らわしと云へども神靈は清し、文字雕琢して筆力頗ぶる健なり、大瀑瀉下する表てに、花片あり、柳影あり、蔬草あり、巨木あり。

奇男兒

是れ露伴氏の爲めの好文題なるべし、若筆總べて今俗を罵しる、用意古しへにあらずして今に在り。

一刹那

深林の一枝か、何分見すかし難し、終の方はアイノ物語にてもあるらん、美しくアイノを詠ずるものは今のホーマーとなるべし、左れど此の切々にては能くも分らず。

眞美人

余は遂に此篇の意義を解する能はず。

トルストイ伯の新著

伯の新著クロイツェル、ソナタ(Kreutzer Sonata)は未だ出ざるの前より評判高く、伯が令嬢チヽアナ子が米國のウイラード女史に送れる書中にも、

汝にが父は我が彼を醜地に描き玉ふの厚意をいと〳〵有がたく謝すれど到底用ひらるまじ……此度の新著は女子淑止の事を主旨とせるものにて特に過激に其意味を論じたるなり……近く醜地の語ばにも譯さるべければ……

とあふ氏は伯の知友米人ホ．プシード嬢には之を譯せんとし、彼スタッド氏は亦た大意を譯して雜誌に掲載せんと待構へ居りしに、新著成れるを見れば意外の出來にて、時を読る所ろ頗ぶる甚き由、之が爲にホップクード嬢は飜譯を中止し、スタッド氏は其批評雜誌にて不同意の旨を公にしたり。未だ見ざれど惡るしくうら悲しき事なり。

卍　卍　卍　卍　卍

或る下宿屋に口くらの主人あり、一日下女に向はく、ソレ御客樣の下の間みぞ、下女、かしこまりました、と答ふ　主人怒つて曰く、かしこまらずに早く行け

雜録

新島襄先生未亡人を訪ふ

松山人

訪門亦一種の流行熱なり

とは言はゞ言へ西施に擬する東施と言はゞ言へ一朝東海波起り浩蕩く一門光〻大星流れ天下の志士をして不覺の血涙に咽ばしめ世間有爲の青年をして蛟龍の雲氣を失ひたるが如く感ぜしめたる日本帝國の大改革者大精神家大教育者たる新島襄先生の永眠し玉ひしより月を閲すること既に六たび朝た洛東若王子山頭松露綠深き處に杖を曳き坂北樹梢高く天を衝く邊に漂泊の墓を訪ひ親しく先生の活ける紀念碑を知るもののためには全く不必要のこととなりど雖も身遠く山河の外に在りて徒に洛都の天を望み空く白雲の去來を觀て轉た斷腸の思ひに沈む人十指女の爲に筆を少の裨益亦しとせんや是れ即ち余が新島令夫人を訪問する所以なり

明治二十三年六月廿八日午前八時同志社校友なる二知己亦共に俱にす先門を入れば格子戸に枝を辭して花壇正に爛熟す一少年竹竿を以て之を擬す無邪氣誠に愛すべし人は云ふ先生大義正に中央にして世を辭せりと豈其れ然らんか天之を與へ天之を奪う

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

天命復た奚ぞ疑はん然りと雖今熟々果實の黄熟を仰ぎ先生遺愛の緣蔭を踏で豈幾多の感なきを得んや相挨終て先づ、

頃日起居如何

そ問ふ令夫人曰く永く神經を疲勞し醫命により出來る丈世事を棄つる樣にし閑散ならんことを期す愛讀の書をすら今や手に近づくると能はず新聞の如きも見ると時餘に至るを得ざる位なり談漸く、

京都婦人の運動

に及ぶ令夫人曰く嚮きに（一昨年）札幌に在りしとき京都婦人共勵會の起るを聞き以爲らく婦人禁酒會の既に在る行り外出に不便なる日本婦人のために會多きは却て益を見ると少からんと近來モリス夫人のために集りしときも來會する婦人僅かに五十名にすぎず夫人のために御氣の毒に思ひし位也。又曰く、貴婦人某々が訪ふと數々なり然とも談話の區域の狹隘なるは實に驚く可し突然某の指形某の服裝某の模樣目下東京に流行すと之れ奈何せば可ならん抔問ひ掛られて甚だ迷惑すると度々なり又機を見て所思を陳べんとするも彼等は巧に之を避くるが故に致方なし實に困つたとあり。又曰く、新島は都踊にも迚てもだめ同行するとはなく酒を出しても飲みもしない杯燗酒を帶びたる呼吸を吹き掛けられて申さるゝには困ると一方ならずと、談頭。

卒業の女學生

に及ぶ令夫人亦同感を表して曰く行爲の評判ある女學生も一度嫁するときは舊慣に絆されて如何ある處に在りて如何なる事業を營み居るや明かに分らざるとは實に殘念なり—然ども僕も好きホームを造り居れば先づ十分なりと云はざるを得ずつまり、天保の人が昇天せずば思ふ通りには行くまじと微笑しつゝ申されたり問ふ、

同志社女學校

のために如何におはし居玉ふや令夫人曰く前述の如く病氣のために餘り度々行くともなさず又何とて別に働くと云ふ樣なともなしと—然ども余は同校教授某姉にきゝしとあり令夫人來て、ドーソ辛抱して務て吳れと申さると度々にて爲めに躊まされて職を奉ずるの心を継續し居るものをはしと然れば令夫人の女學校に對する知る可きあり。其他、某女史のよ等も彼是承りし處もありしか此際にも來客の出入少からず昨廿七日は同志社卒業式にて自ら待客の勞を採り昨夜も祝會のために勞し一時半許よりは安眠し玉はさる由を承りたれば夫人將來に

Digitized by Google
Original from CORNELL UNIVERSITY

如何に計企し玉ふ處ありや等大切ある問題を尋ぬることを得す他日再訪を期して友人と共に只管幽精の地に避去し玉ふ様勧め參せて辭したり。

夫人は目下多病なり

然ども子供等の孰々卒業して世に出て又許行する等を見て樂み居らるゝと色に現はる或は令夫人の高く虚するが如く見ゆると疑ふものありと聞く余以爲へらく是賢妻良母の甚しきものなり令夫人は几と勇ましき女丈夫なり今やキリストの愛に包まれて温平たる獄囚に人をして親ましむべし客に接するに微笑は常に分明に躍りて止まず殊に命律天賦の否両りは客をして一種の愛慾電氣を感ぜしむ豈に勝先生嘗て亡先生に附る處所謂處人藹然たるものなからんや。

愛國と美術

しみぢ

昔しデメトリアス王がローヅの都を攻撃するとき、畫人プロトゼチス、都内の小樓に寓してアイアリサスの畫を描し居たりける。此時王は砲烟の間だに名手の揮毫を失はんことを恐れ寧ろ凱旋の光榮を止めて彼の名畫を存せんことを決し、俄わかに進撃を止どむ。時にプロトゼチスは恰かも敵の鋒前にあり日に彈丸の轟きを聽くと云へども心に感ずることなし、寂々庭裏に逍遙し、坐して亦た毫を揮ふ、殆んど餘事なきの様なり、後ち執へられて王の前に出づ、王云く、先生如何なれば、敵前にたて能く如此く靜安なりしやと、プロトゼチスの云く、王は城を落さんとするの人なるべし、畫を破らんとするの人にあらざるべし、余之を信ず、ゆへに絶て筆を止めざりし耳と。プリニー此を稱して切りに賞め賛ゆるに似たり、然れども一國存亡の機に際して獨り美術に迷執するとあんぞ賞するに堪へん、如此きは似而非風流家の誇る所ろにして眞の美術家の恥るところ也、願くは我國文人の榮とする所ろ彼にあらずして此に在らんことを。

義務

玉堂

カント云く義務！、あゝ義務と云ふと、何如に是驚くべきの意想ある、元と好めるが爲にあらず、媚ぶるが爲にあらず、亦た脅やかすが爲にもあらず、只だ其律法を靈魂に請けて終始之に尊崇を表し、たとひ常に從順なることを得ざるとも常に之を敬ふことを止めず、其律法の前には總ての我慾皆な默して服す、たとひ密かに反かんとするも其目前に威拜せざるはなし、あゝ義務！、汝はそも〳〵何處より發生し來り、人をして如此く強大なる畏敬を表せしむる哉。

Digitized by Google
Original from CORNELL UNIVERSITY

賤の身の果

サッフー原作　雲峯譯

いとも貧しき賤の男が
魂魄の行方みちびかん
うつせみの世に醫術の
絶なんとする賤が庵に
首を垂てうや／＼しく
今こそ切れん賤の身の果
かぎりなき世に立出る
綸のひゞきは聞えねど
露ばかりなる玉の緒の
歩みしづかに立寄りつ
うやまう心持たなゝん

なみかぜあるゝ世の中の
高根にかゝるしらくもの
天つみくにゝかぎりなく
貴きひともかずならじ
やまひの床に臥すしづの
いざ敬めなん賤の玉の緒
富もくらゐもくらゐ山
夢て消ぬべきものにぞある
生らん靈魂に比ぶれば
あれにし庵に淋しくも
魂魄の寶ぞいや貴とき

入りて見なゝん賤が庵に
染ふひとこそなかりけれ
門の戸もりもなかりけり
惱めるさまぞあはれなる
うき世のがるゝ賤の男の
實に寂なしや賤の身の果
賤の痛つき病らんと
立よる人なせきとむる
やまひの床にくるしげに
うつせみの身を殘し置て
玉の緒今か絶えはてん

賤のにはもせ冷えわたり
あれにしいほに凄みある
痩せ細りぬるしづの女が
纖弱はきかひなさし延つ
絶えなんとする賤の男の
實に憐れなり賤の身の果
いとも濕りて荒果てぬ
人も通はずなりにけり
やまひの床に立よりて
露ばかりなる玉の緒の
首を上るもちからなし

乳房もとむるをさなごの
叫びも何時かたえ果てゝ
たえ入るばかり吐く息と
寂れはてたる庵のうちに
聞くだにかなし賤の身の果
なく聲細くきこゆなり
ふやめる賤が苦しげに
今はの際のうめきのみ
こゝろ細くも聞ゆめり

さはさりながら身の果は
眞半の月ざしむしひらき
ほだしあき身となれるごと
暫しうき世のかりの宿り
うき苦しみにあひし身も
つゆの玉の緒絶えぬれば
實に貴としや賤の玉の緒
驚くばかりかはるかふ
えだしもかたき罪人の
切り行こそ不思議なれ
貧しきしづと生れ出で
日影まつまのしら露の
天つみくにゝ歸るめり

悟りはてしぞ不思議なる
古きころもは見えながら
天つみそらにひさかたの
いとうるはしき天つ國に
いと樂しくもとこしへに
實に貴ふとしや賤の玉の緒
やまひの床に立よれば
看るらん人はなかりけ
日影さやかにさし出て
賤が玉の緒よみがへり
すめらみ神とすまふらん

余嘗て以爲らく我國詩に適する句調必らずしも七五の外にあらんと、爾來竊かに考究する所ありき、而して未だ得る所あらず、某外諸氏の解決呈出でゝより以來幾多の格調の詩出でぬ、されど余は未だ滿足する能はず、さりとて自ら考へし所なし、故に暫らく七五の格律に從ふ、嘗て「テニソン」の作「荒庵」と「ブラウニング」の詩を譯するに當り、心竊かに詩の翻譯の易からざるを感じぬ、今また不文を顧みず「サッフー」の詩「Pauper's Death-bed」と題するを譯出しぬ、蓋し貧人の惨状を寫せるに感ずる所あればなり、余豈好んで濫を作するものならんや

水無月盡夜初更孤燈のもとに於て　雲峯子識す

左の圖は先頃ろ米國の都々にて流行し

（米國流行日本女服）

西洋婦人が喜びて着用する日本婦人服の圖なり

革命は子供が文字書く似し

かすみ

人類の世に生れ來る門前、神は之に數多の文字を與へぬ、謂ひ玉ひけらく、汝ぢ之を綴りて語ばを爲せと、人類則はち古しへより樣々の語ばを造りぬ、其語ば或はグリーキとなり、ロマとあり、英となり、佛となり、蘭となり、漢となり、藤原氏とあり、羅甸となり、維新となりぬ、左れど何れも皆な落付きなく、未だ完しと云ふ可らず、いや果てに道天より降る、其語は神が人類に當に斯く綴るべしと預定ありけるものに適へり、人類之に從はんとする乎、もしくは猶百千同じきことを繰反さんとする乎、改革あるもの即はち之れのみ、改革に具備わるもの亦即はち之のみ。

佛國の慈善家三婦人の傳

序　　　　雪峯生

十七世紀に於て佛國に婦人の慈善家あり、貧人窮民の救濟に著しき功績を現はしき、是誠に時勢の需用止む可からざりしが故なり、爾來此慈善家は教會に於て、國内に於て善き勢力を及ぼし、善き感化を與へぬ。之より先き婦人にして宗教を奉ぜしものもありき、されど教會に加はりしより、世人と交通するを得ず、從て不幸の人、可憐の徒　救ふによしなかりき、會堂寺院の門外に集ひ來る貧窮者に辛ふして施物を與へぬ、されど固き誓約ありて是とても意に任せざりき、況して世の悲しめる者、貧しき者、苦しめる者の間に立入り、言語を懇にし、手を伸して、無宿者病人等を救助するをや、婦人にして慈善の事業を爲さん爲め種々の會集を結びしが如何にせん教會の掣肘する所とありて意の如く手足を伸ばす能はざりしき、十一世紀以來慈善の事業に力を盡すべき一會存しぬ、教會に於て次第に教育主義に

傾きければ婦人も自ら教育に身を委し、純全たる尼となりて亦世の不幸薄命の徒を顧るの時なかりき、是慈善會創起以前の略況なりかし。

此に十七世紀に於て一大慈善會起りぬ、こは有名なる三女傑と緻密の關係を有せり、婦人の身にて貧民の奴婢を以て自ら任じ、勇起猪進して大業を爲せしこそ、誠に佛國宗教史に大書特筆すべき美事なれ、セント、ヴヰンセント、デポール彼等に名を附して「貧民の奴婢」といふ、後日「慈善の姉妹」となん呼びしは彼等の事なりけり、是最も適當せる名にして當時佛國内に起りし數多の慈善會を總稱してかく呼びたりき、三女傑の爲せし所誠に高貴の事業にして後世基督教徒の模範となりぬ、爾來彼等の風を聞て挺身猪發せしもの其幾許なるを知らず、やんごとなき貴婦淑女より賤しき際なる人々に至る迄貧しき兄弟姉妹の爲めに盡さんとする心を起しぬ、彼等が信奉せし主は嘗て命じ玉ひき「汝等この憐れなる者にいと小さき事を爲すは即ち我に爲すなり」と、彼等は之を信じぬ、貧者窮民を救ふは正しく主に事ふる道なりと知りぬ。

吾人は慈善家の會集を見て、二種の人物一致合心せし事を知る即ち最上等社會の貴女と最下等社會の賤婦と左携右提して慈善の天職を全ふせり、身分高き者も高慢に流れず、賤しきものも僞する事なく美事を共にせしは誠に稱讃すべき事と云ふべし、彼慈善會に於て最も有力にして功績著しかりしはビヤンタル、レグラス、ミラミヲンの三婦人とす、彼等の生涯は慈善會の興亡隆衰と密接の關係を有す、吾人は左に三婦人の傳を叙述して功績と過失とを明示せん。

三女其生涯に於て甚だ相似たる所ありき、其一人は社會に高き位置を占め、富と權力を持ちぬ彼等は皆一度は婚しぬ、皆不幸にして、四海波靜けき時疾く去り、年尙若くして、其人を失ひぬ、彼等は皆貧民窮者の奴婢たりき、彼等は只に金錢物貨の施與をなすのみならず、自ら四肢五體を役して働らきぬ、賤しき勤めとても辭せざりき、彼等は眞に聖使たるの資格を備へたり、寡婦たるの任を全ふせり、彼等は幼兒をはぐくみ、旅人を宿し、使徒の足を洗ひ、病めるものを慰め、目を鋭くしてよき事を爲しぬ。

三女等しく慈善家中の錚々たるものにして慈善の事業に專心せり皆ローマンキヤソリツクを信奉しぬ、當時キヤソリツク教僧敗し、濁風滿ち汚習隆なりき、彼等素より純粹の女子たり、然らぬ感化を受るを免れさりき、されど其欠點と長所を指

擬せば實に得がたき人物にして、キャソリック教徒中最も美はしき模範と云ふべし、彼等が腐敗汚濁の時代に在つて最も清浄白潔の女子たりしを思ふ毎に吾人は暗黒惨澹の夜に一點の紅火を望むの感なくんばあらず、當時僧侶の貴族僧侶等は奢侈遊惰に流れ貧民を見る塵芥の如かりき、此時に當り病める者、悲しめる者、死なんとする者の間に入り、天使の如く見舞ひ幾多不幸者の心を慰め、命を救ひぬ、彼等の實際に於ては新教の教徒もおさ〳〵劣る所なし、大に尊敬し、模範とすべき者なし。

懸賞答文

理想の男子

中點答文　米　子

確志　五十點

天地の眞理を看破し自信自重以て己の主義とする所は確乎として千挫万折するも之を曲げず假令權威を以て强迫せらるゝも全世界の人己に反對するも自身の頭上に落ち來るも恬然の爲めに誘惑せらるゝも怡然として動かされず能く夫等に打ち克ち益々其志を固くし己が主義とする所は死を以て之を貫徹するの氣象を有するをいふなり万事の成る皆此堅忍不拔に由りてなり故に之を尤も高點とす。

仁愛　四十五點

人は生れながらにして己を愛せざるなしされど其愛に二種あり眞の愛と僞りの愛あり即ち肉體の慾を滿足さするを以て己を愛すると思ふは是反て己を惡むなり眞の愛は然らず己が身は靈魂の宿る器なれば正道に適ふて害ふ肉の慾を去り高尙の思想を保し靈魂の生命を潔め合せて身體をも壯健に保つを云ふなりされば斯く己を愛するの法を知り其心を以て他人に及ぼし其身を盡して獻身犠牲の行を實施し一點一劃愛に根ざし愛の外に出るや至愛となり又行となるに至れば其他の凡ての德即ち剛膽果決熱心謙遜忍耐等は自然にして備はるべし凡百の聖德を帶る常に志の立ちし後の第一着に有せざるべからず故に次點となす。

人苟くも右二答の如くなれば王公貴人之に遇へば敬畏の心を起し小兒之を見る時は愛慕の心を生ず此の如くなれば心靈上無欠の紳士と申すべし。

優美　五點

されど今一ッ容貌端麗にして野鄙の風なく骨格逞しく一見人をして其丈夫たるを知らしむる威風あらまほし右の資格を有し玉ふ君子こそ小妹の理想する紳士にこそあるなれ聊か試問に應ず。

きよめぬ庭　其十六

洒落齋主人

賣物の評判

招牌にいつはりなし、と云へる諺古よりあれど、いつはりのなき招牌みたることいと稀なり、正札附と招牌かゝげたるに入りて直切らば、御愛嬌にとて直引すめれ。定價なるほど、云ふ招牌つきの書物買ふに、二割ほどは先方よりまけて出す、牛肉の招牌見當に入りて食ふに、馬肉のあなたこなたに混れり。正白米と云ふ招牌をあてに買ふてみるに、二割は當節の定めなりとて、西貢米をまぜたり。或は政治家と自稱する人たづねて、其肚の底たゝけば、年俸の八百圓ほしさに生命かけすと云ふ、宗教家と人も許す智識たづねて説を聞けば、他宗を罵り賤しめ、博愛と云へる宗祖の教誨忘れて、己れの宗教信ぜぬ人は、人にあらぬが如く云ひ、さては金も欲しそふに云ふ、何官と云へる招牌肩書にあげながら、政黨あふりたて、政府に反對する者あり、紳商と招牌かゝけたる者の内幕みれば、官員の竈取廻りしてかすり取する才取あり。學士と招牌かけたる人に、專門のこときゝてさへ口ごもるえせ學者あり。大學とて門の招牌筆太にかきながら、尋常中學しかくほどの學課のみより備へざるあり。醫師と招牌かけながら、解剖學生理學の片端さえしらぬ庸醫あり。そがうちにも甚しきは、古道具やの招牌かけて、不正品買をなし、料理やの招牌かけて貸座席に似よりたる業を營み、藝妓の招牌かけて娼妓の如き生活をなすもの、さては慈善者の招牌かゝけたる者の、己れの名譽の爲にする杯あり、沙汰のかぎりと云はまし。

物賣らんとするものゝ聲、いと朗におもしろく呼ぶはよし呼びかたのをかしからぬはうれあしゝとなん。ことにをかしきは夏の初に來なる苗や聲「茄子苗や黄瓜の苗や瓢箪朝顏唐もろこしの苗」或は氷うりの「氷こうり」石花菜賣の「ところてんやてんや」と一つ余り半よぶもをかし。さるに此夏にかぎりて賣物は殖えたり、そは候補者と何云へるものを賣あめど、此は自から呼び歩りくもあり、又は他人して呼び歩かするも

あれど、此の賣物にかぎりて、買手の方に賣手より何がしの價をとらすときゝぬ。そが賣聲もさま〴〵ありて、みなおのれ〳〵の効能を說きありくよし、甚しきは此れがため氣狂しき迄にて、暴行强迫とか云へる、恐しきことをなすものさへありときゝぬ。此等のうちには、呼ぶ聲のいと上手なるあり、又はしからざるもあり、或は呼び聲のみいと大におもしろけれど、品物の無下にいやしきあり、己のみ勝を制せんとて、いたどたりにく〳〵して人を罵りし爲、かへりて己を痛むるものあり。實におもしろの賣物なるかな、實におもしろの賣聲なるかな。今も昔もかわらぬ賑ひ、肩すり合車の轄うちつけて、ふくれ殺し聲高に諍を始むる者あるまで繁き、上野の公園或は淺草の公園の廣場見渡せば、齒拔き、居合拔、皹皸、凍瘡の妙藥、座頭の眼藥など賣る者、互ひにならびて商ひをなせり。そが中に萬病の煉藥賣る者あり、又たそが側に砂糖生姜賣る者ありけり、みな口々に賣聲をあげ、各能書をならべて競ひ居たり。

生姜賣　生姜をはさみて出しつゝ

エー先づ生姜は口中をうるほし、痰を切り、熱を去り、消化を能くし、溜飲をとゞめ、其味甘露の如し

とて人々に少しづゝ配りければ、皆これを味ひ、此はまことに風味よしとておびたゞしく賣れけり。煉藥賣もそれにはおとらじと、ひたすら効能を呼ばれども、買ふ人さらになければ、此は生姜賣の如く、品物を與へざれば賣れざる可しと思ひ、煉藥を匕の先につけ

煉　そも〳〵此の煉藥には五味のあぢはひあり、すこしく舌の尖につけるときは、忽ちにして鬱氣をはらし氣力を增し、老人は壯夫にも劣らずなり、年若の方々は學問勉强のとき此藥を用ゐ給へば、勞れることなく記臆をよく致しますこと、まことに神の如し

とて、見物の半に少しづゝ着けあるきけれど、皆めて見んとする人なし

煉　皆樣一寸なめて御覽じませ

と云ふに側なる人

藥の樣子もわからないのに、滅多に嘗られるものか

と云ふにぞ煉藥賣いたくもどかしがりて

煉　ア、わからん人達ダナ毒にも藥にもならんから、なめてみなさいと云のダ。

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

小説

うき世　其七

かほる

運の通塞は天の命なり、時の得失は自然の勢なり、人力の如何ともなし得べきに非ず、よく夫れ命を知り勢を悟らば浮世三界悲しむべき事あらじ、さは云へ通常の人情をもてるもの悟り得て安んずる事は蓋し易からず余もと山野の一賤兒、深く學ばず、博く究めず、智淺く、識渺し、未だ天命を解せず、時勢を悟らず、轉た身の不遇を喞つ、大方の世の人己が經驗を推して人の身の上、世の中を思ひ見るめり、余は自ら痛悲慘愴の苦境に沈みぬ、されば余は常に心に感じぬ、世に不幸薄命の人多かるを。

人世百事意の如くならず、よき人苦しむもあり、惡しき人榮ゆるもあり、邪曲の事時を得、是正のもの世に遇はず誠に善惡轉倒し、正邪反却する世なりけり、余は此土に生を受け心情雪の如く清白に、無邪無心の稚子にてありし時より今日迄快樂幸福は露程も知らず、幾多の辛酸痛苦を嘗めたりき、今思ひ極り、情切なり、泣て天地に訴ふ、天道果して是なるや非なるや。

行路難し行路難し、人世行路眞に難し、山に登らんか白雲路を塞ぐ、河を渡らんか氷水を藏ふ、前途暗黑行く所を知らず顧れば白雲空に亂れて萬里茫然たり、是ぞうき世の眞相なる、あやめる人繁く痛める者多かるは理りぞかし、斯る世に遇ひし故余はいと悲しく口惜しく思ひし事多かりき、されど學びの道に進み得ざりし程悲しく口惜しかりしはなし、余が十二三歳の頃より家にあらば、内外の用も辨じ得るとや思されけん、母上は余が學校に通はんを許し玉はぬ日屢々なりき、打つゞきて學びたりせば十四五歳の頃には小學校も終へたるべし、余が十五歳の時まだ二年ならねば卒業を卒へざりき、よく母上の仰せに從はんには心直し玉ふらん、學校にも通はれんと、新旭東窓に紅なる朝より、宿鳥空に鳴くの夕まで力の限り働きぬされど思ふことまゝならぬぞ世の常なる余は空しく學校を打ながめつゝ許多の日數を送りけり、夢は此世の外のものならじ、思ふ事のみ見えにけり、よな／＼結ぶ夢路たどりて、學の道にふみかへりぬ、余は夢心にて嬉しく感じぬ、覺めての後は涙衣襟に滴りしが、……

余が十五歳の夏にやありけん、母上は余を呼び云ひ聞かせ玉ひし事ありけり、嗚呼今此にものせんは更に悲しく、愁涙止めがたし、余があきあとにて人見て如何に思ふらん、文を得

かゝぬ身の口惜しさ、感激する所の萬分だに現はし得ず、されど今止むべきに非ず、此に記さん、母上は兼て父上にも告げ玉ひけん、父上は傍らに在はして默し玉ひき、母上は又ひ玉ひけり、農家に生れ來し身は亦農業を爲すこそ其の道なれ、なまじひに學問せば農業は惡り賤むるやなりはてん、さりとて學問もて世に立たんには、我生涯農學校等に遊ぶるゝの外にあらじ、校は近きにあり、近き里の農家は出ずやと、余は又ひ話かん術もなく、只茫然たりき、終りに口を開かてやよ母上小學校だに終らんには余の望みに從はん、今より二年の學問を修し得へかしと誘るがらに答へぬ、書は好める讀書し用は足かり、それに從き片山中、智よ六、文字かゝん人もあし、歴代の道に親みたりとて何へ益ん、父の様の話はかず、容しく烟木と朽ちはてん身にしあれば深く望はんや、聞なきは明しと、母上は又ひ語ひぬ余は其後讀書は調明かす所を知ざりき」朝に床を開き、容捩ぶ鳥を見て我身の自由ならぬを嘆じ、夕に穴を出て山野に遊ぶ狐兎の類を見ては其束縛なきをうらやみぬ、余は學校に近かりける畑に耕しゝ事ありき、急ぎ業を果しつ學校の側にかり童子の讀むを聞き居たり、教師出て來て學校には來ずや杯問はれし時は實に切なかりき、不如意の事多かる内に分きて悲しきは是なりき、人世行路難に難し、不如意の事何ぞ夫れ多き。

余が幼き時養ひ取りしと聞きつる兄上は余が十三歳の頃より亦余の家に養ふ事となりぬ、余は他に兄弟とてなかりければ、親身の兄上とも思ひぬ、兄上もよく余を愛しみ玉ひけり、余は常に兄上に伴はれ耕作に出てぬ、春ともなれば山里は新著四方に生ひ出て、緑の褥しけるが如し、兄上や近きあたりの稚子と打連て、菜草の若芽つみし日もあり、或ひは芝生につ花ぬき、時には山邊に蕨折りぬ、夏の日來れば谷川に釣を垂れ、秋來ふく山邊に紅葉を求りぬ、其際は余が樂しみの其もなるものなりき、されど斯る樂しき時にも借て絶えざりき、學校に通はまく欲せし余の希望は、

夏の日の炎暑き頃、冬の日の寒き日、農家耕人は休らふ事ぞ多かりける、四時寒暑に從ふて耕り、雨露時に從つて出す、日照り、花咲く、播て耕し、實て收む、今日の勞苦は今日にて足る、明日と過ぎ、明日を期し、望なく、企なし、不文朦朧の農者は斯る世渡を爲て躬き、朝に露の命を享け夕に北邙の塵と化す、名譽とやらんに似りける、暮酔き、夏植、秋刈の外亦爲さんともせず、夏日炎下一時の夢に暫刻の快樂を貪り、冬

日爐邊一塊の紅火に頃時の幸福を偸む、優々閑々世を終ふ、處世具に大夢とは斯る生涯をや云ふべからん。

自然に備はる天質なりけりな稚きより、余は書読み文字學ばんを好みぬ、余は醉夢の中に世を渡る、蜉蝣社會に生れ來ぬ、蜉蝣の如く世を終りたらんには悲しき事も悲しと思はざりけん、されど余は不幸にして蜉蝣の如く身を終ふる能はざりき、無爲無心の賤の男と朽ち果てんを屑く思はざりき、晝は人の憩へる時靜かに書よみ、夜は家の人々睡れる後孤燈の光りに文字かきならひぬ、事問はん人だになくて苦學をばなしたりけり。

幼き身の獨り學び、進達の速かならねば、學びの窓に入らまく望みぬ、されど其甲斐なかりき、餘暇に書よむだに快くは許されぬ身なりけり、況してや學びの道に踏み入らん杯は思ひもよらぬ事なりき余は屢々父上に乞ふて都に上らんと望みぬ、牝雞促さねば牡雞如何でか時に鳴かん、母上許し給はねば素より父上は許し玉はざりき、賤しき社會には女性の勢力強きものなり、烏兎去つて匆々たり、余は空しく都の空を打眺めつ三年の月日を數へしぞ悲しかりける。

都にありて高樓氣惰き處に育くまれ、深窓風澄める裏に養はる丶、やんごとなき人々は知り玉ふまじ、濁界汚世具に見るに堪えざる事を、今此にものせんも汚はし、嗚呼汚風世に充ち、腐敗人心に入る、幼きは十四五歳より老ひたるは四十ちあまりに至るまで、よからぬ所に行き、汚れたる行ひすめり、余は斯る汚濁の社會に在て幾多の誘惑に遇ひぬ、幸に天余を捨てず、心未だ清かりけん遂に迷路に入らず、汚界に沈まざりき、正は邪を容れず、暗は明を悪む、余が濁悪の交りを結ばぬとて余を悪み嫉みしも多かりき、徳孤ならず必らず鄰あり、心あるものは余が書を好み、行の潔きを見て稱讃たりき、余がなからん後に此文を讀み玉ふ人あらば乞ふ世を潔め、人心を洗ふ事に力盡し給へかし、世事多端、人務繁雜なるべし、されど事物に緩急あり、速に世を救ひ、人を覺らしめずば、邦家の前途如何ならん四千万の蒼生を如何せん、春へ來り、思ひ廻らせば感慨た切なり、風は破窓を犯して雨蕭々たり、霖雨を含んで天色濛々たり、感泣すれど應ずるものなし、涙徒らに孤襟を潤はすのみ。

ロマは一日にして成らず、アンヒロの彫刻は十年にして終る、君子豈に一朝にして成らんや。

寄書

避暑地案内（中）

K．M．生

甑にして船は舞鶴に風波の險を凌ぎて稍く上總金谷に到着しけるが風波も段々靜かになりたり金谷は東京を距る大凡十五里內外ならんと覺ふ同地は戸數大凡百五十戸許りにて至て僻村宿泊すべきの旅舍もなく港轉觀音崎と相對して稍々宜しき方なれども海水甚だ深くして不練の水浴には少く危險の恐あり其れより船は尙進行して房州保田村に至りぬ其中間鋸山あり房總二州の國境にて羅漢山ある一峯屹立し十州一覽の勝景あり保田は戸數二百許り軈がて旅店に着く海底は沙地なれども甚だ深くして水浴に便ならず其れより勝山に至れば戸數大凡そ百五十許り矣頗り旅店の便に乏けれども風景の美なることは近村其比を見ざる程にて一帶の海面滿碧にして陽輪光を浸し山翠影を鋪き實に佳景と謂ふべきなり避暑の遊客此の風景を弄するも亦一興あることなれば此に上陸して逗留せんとする者は旅店に投ぜず閑靜の佛院に賴みて一室を假る方宜しかるべし其より船は那古に至れば同村通じて千二百戸許りあり余此地にて上陸し處々を逍遙せしが那古山の山腹に觀音堂あり其造構甚だ壯大ならざれども稍々美麗なり山上より海上を眺むれば風濤も稍々止みて水天一碧と爲り風帆雲鳥の遠靄中に隱顯し翠螺雪浪の銀濤中に出沒し烟波縹渺として明眉畫くが如きの風景眼前に弄するを得て美觀極りなかりき賞嘆の際思はず左の一句を得たり。

ひとむれの綠と見しは那古の山の
　松の波間にうつるなりけり

此地の旅店山田屋なるもの尤も宜しく田舍には珍しき良店なり余は此より一里の道を歩みて北條に至る人口大凡千二百許りの地にして裁判所あり郡役所あり警察署あり銀行あり私立英語學校あり頗る繁花の地なり旅店は木村屋吉野庵などは重もなるものにして遊客の便利なるは亦房州地方第一なるべし此地より距る少許にして館山あり戸數殆んど北條に均く其の繁花は北條に如かざるべけれども房州地方にては有名なる所なり海濱は北條より當地に至る一帶の港內稍々廣くして遠淺なるが故浴客の便尤も宜し去れど近來夏時金を儲すの候來て暑を此地に避くるもの陸續絶えずと云ふ余は北條に達する時は恰も午後一時半にして吉野庵に投宿し暫時憩息して市內を巡遊せり仝所は政黨とか黨派とか云ふものは一切なく政事上の事には餘程冷淡なる由なれども國會開會の時期も最早目下に迫りたれば議員候補者たらんと願ふもの追ひ〱舞ひ込み改進主義を取るの人には安田勳氏自由主義を取る人には作間眞香作間吉太郎の二氏ありて初期の國會には是非々々議員にならんとて頻りと奔走し居れり來る二十一日には北條町に於て島田三郎氏安田勳氏外二三の人々出席して演說并に懇親會を開かるゝ由市中に廣告を揭げ居れり此夜は當所に一泊せしが夜もすがら水鷄の聲耳を妨げければ戲て一句を詠じぬ

夢さめてつく〲聞けば小山田の
　くろにくいなのたえすなくなり

思ひ得たることども　其二

尙絅生

○先達て博覽會へ行きしに或小學校の教師が綺羅を着飾らせたる女生徒の一隊を引連れ見物せしむるを見受けたり此數多の生徒の父兄は必ずしも有餘りたる資金にて子弟を學ばしむるものゝみに非ず中には隨分つらき思をなして授業料を差出すも多からんと思はるゝに生徒は何れも紅粉を粧ひ綺布をまとひまことにあでやかにいで立ち居れりこは教育未だ一般に普及せずして小學校には中以上の生活をなすものゝ子弟のみ多きが故かはた中以下のものあるも所謂まきぞへにて親父等が油汗を流して得たる金をもかゝる途に使用せしむるによるか何にしても喜ばしからぬことならずや吾等は當局者に於て充分注意せられ度く思ふなり此事は既に昨年憲法發布のみぎりに或新聞にても言ひたることもあるやに覺ゆれども其弊いまだに止まぬ樣なればかくは申しなくるなり。

○同じ意味の言葉ながら婦人方の談話につかはるゝには失敬と云はんよりは失禮と云ふ方奧ゆかしく聞へ、社會と云はんよりは世の中、（こは意味の異なる處もあるべけれど）妾と云はんよりは私、愚按など云はんよりは私の考へと云ふ方まことにきゝよき樣なり併し今何が故に失敬と云ふがさつにて失禮と云ふがなだやかなるかなどゝ聞かれては答へにくけれど何となく左樣に聞ゆる樣に思ふ尙、蓋、如何となれば、等の言葉は前に舉げたるものよりは一層不似合の樣覺ゆ。

郊外

むさしの作

山にかこまる、　しづけき野邊。
野邊にしげれる、　若草の、
中に三つ四つ、　さきあえる　蓮華草。
そのあいらしさ！

同

野邊をよこぎる、　すゞけき流。
流れにそへる　楊柳の、
陰に一人り二人り　つりする　太公望。
そのゆかしさ！

開書

者みね子の君に返す

かほる

凡そ世にありて悲しめるものは詞侍もて慰めらるゝを最も嬉と思ふなり、余は昔て小說を好みて讀みぬ、一度は小說家とならんと迄思ひぬ、されど退て思へらく今日は誠に小說界の亂世なり、英士豪傑の割據あるや否やは余之を知らず、只知る無數の雜兵入り亂れ、甲起り乙蹶たれ、一人榮ゆれば他衰ふ、未だ隈じめ云ふ可からず桂冠は果して誰の手に落るやを、光榮煙して止まらず、盤擾潛じて靜かなる事なし、是偏に統世治亂の勇將なきが故なるべし、斯る絕刹枝潛定りなき小說界に入らんは難きが中に難き事なるべし、雜兵となつて終らんより學ぶ所に加はらざらん方勝れりと思ひ、小說を爲せん事は思ひ止みぬ、近頃少し思ふ所ありて此に一篇をものしぬ、素より小說といふべきものならじ、そは小說はいと高尙なる文學にして到底我等の企て及ふべき所ならねばなり文かゝん事をも知らぬ身のよしなし事、貴重の紙面を汚し、讀者の淸閑を煩はさんはいとかしこしともかしこし、前號にてつるがなるみね子の君よりなさけ深き御言葉をいたゞき一は嬉しく思ひ、一は慚愧に堪へず冷汗の背に浹するを覺えざりき、余未だ曾つて事を採りし事なし、今拙なき文をものしてつる子の君の御目に止りしを辱ぶ、御言葉の程は誠に謝するの外なし、間乞ふらくは完結に至るの日を待ち玉へかし字句の拙きをも忍びて高覽を玉へかし、また余は他日申述る所あるべし、何々亂筆、廿七日夕陽西山に傾く時、かほるしるす。

文詢

みれ子

●神戸T. N.生様　過日御尋ねの件につき文學士某に質し相伺ひ候處左に御答へ申上候御尋問中には long butler と二字打つゞけに記載有之候得共之は間違なるべし long の前に文字なき所あり又 long と云ふ字にて句切となり居る筈にて御寫候即ち文言は左の如くあるが正しかるべしと存候「In the cellar find the land of the Child of Hales...... long Butler 笑」the Child of Hales とは當時評判高かりし或大男（身丈九尺千五百七十八年に生る）に附したる名にてヘールスノ寺に葬りありしとの事なり其年とは其年の模型を右に刻みたるにて之は其頃ペピスの行きしケンブリッヂかオックスフォルト大學の物置（地窖）にありしものと思はる long の前に空所あるは其年の長さを記さんとて明け置きたるに相違なし Butler 笑 とは右 Child of Hales 其年を見る折りに案內せし渡人にニシルリング與へしとの意なり。

●愛知二三子様　君の御問ひも矢張り文學士に御尋ね申候故其答の如く左に知らせ申上候日本人が獨逸語を學ぶに最も簡便なる書物は未だ無之候當今用ひ居る者は多くは本と獨逸の少年の爲めに著作せし讀本なるにて日本人初學の者の爲めには便利ならざるものにて御幹旋然しなし一通り英語に通じ居る人には獨逸語を學ぶに恰好なる書物澤山有之候就中殊も例なき者を擧ぐれば讀本級の者にては Buchheim's Modern German Reader, Part I & II, Oxford at the Clarendon Press; Wm. Dent's Colloquial Exercises and Select German Reader, Boston: D. C. Heath & Company. 文法書にては [illegible]'s Conversational Grammar of the German Language, Rivingtons Waterloo Place, London. 辭書にては Whitney's German Dictionary, Macmillan & co, London & New york. 等と存候

未だ英語等の語に通ぜざる人に取りては仕方なく獨逸出來の讀本などを用ひざるを得ざる義と存候先づ Bock's deutsches Lesebuch など宜しかるべしと存候然し前に掲げたる Buchheim 等の讀本は英語を知らざる者に取りても案外便利なるものと存ぜられ候辭書には高、本田兩氏新版の獨和辭書、對字辭大全よろしかるべく文法書には Kern's Leitfaden für den Anfangsunterricht der deutschen Grammatik 又は Wichmann's deutsch Elementar-Grammatik が宜しかるべしと存候。

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

時事

七月五日

謂ふに實に一夢の如し、候補者室も泡の如く消え、虹の如き議員再びすく失せぬ、君子多くは撰ばれず、意外の人現はれ出でたり、たれぞ執しりなし、願くは今后四年謹しみて其責任を盡くし、國民の為め其者となり努力となれ。

今后

十一月二十五日の開會に至る迄に、議員も、凡人も、記者も、官吏も、皆く其國家を憂慮するものは皆く研究するにあらざるべからず、而して出來る丈けは安全を保持し、決して無謀の出來ロなるには國家を利するの決心をなす、更に今日以后を特に大切なるものとする也。

村會議員の問題

撰擧の騷ぎにておもらく中止したり、然れども此よりは弘く研究したる其氣を舉て長く研究し、一層に非常の注意をなさざる可らず、同志の諸君希はくは熟諳せよ。

行政裁判所

更に角彈劾らしき事をなし得るの場所出來たり、万一行政裁判所にて不滿足の裁判を為されたりとも、最早其上に再審を求むることを得ざるの定めなれど、法を活かして民權を擴張するは矢張り輿論の強大なるに基ひす、何にいたせ輿論が強く且つ正しからねば何事も出來ざる也。

新聞抄

從來政治好きの新聞紙なるに、此頃は特更ら政治の事のみを掲載し、普通の讀者は殆んど厭を生じぬ、新聞紙は社會の鏡なり、而して社會には消々としたる山林もあり、洋々たる海もあり、動かざる山もあり、快ちよき川もあり、人類には男のみならず女もあり、貴族のみならず平民もあり、人事には政治の外にいとく面白き什事極めて多し、故に願はくは社會の諸象を明白に映寫し、世界をして只だ單調子一色の報々對たるが如く思はしむる勿れ。之れ讀者のみの為にあらず、新聞紙の為にも亦た甘子の多き益あるべし。

女學生の歸省を送る

諸君將に家に歸らんとす、母と姉とは門外に出でゝ迎へ、父兄は今や世事を恐へて其辛抱く諸君の前途に待てり。近年女學生の為に階級を製造せし者多く、特に何等の惡論ぞ切りに女子教育を拒絶せんとし、世間の人往らに女學を害す、此を

以ての故に父兄母姉諸君の爲に日夜深痛し諸君の風采何如なれる、諸君の德操何如なれると案じつゝ待てり、諸君が其學修したる所ろを發表し、生きたる雛形によりて女子敎育の結果を明らかに示し、以て女學の功用を辨明するは則はち今日にあり、諸君が德の美なると否らざるとは今や實に女學隆衰の一機を轉ずる也、諸君深く決する所ろあれ、而して后ち欣々鄕里に向つて發程せよ。

子守練習所

婦人矯風會風俗部の部員中、德富ひさ湯淺はつ兩夫人を主とし重も赤坂區に居住の人々發起して、子守練習所を開かる、子守の敎へざる可らざるや久し、今にして一朝之を得たり、欣賀極まる所ろなし、希はくは其長しなへに成功せんことを。

コレラ

長崎に發す、中濱東一郎氏官命を帶びて出張す、あゝ皇天願ふらくは窮民に更に窮を增すこと勿れ、謹禱、謹禱。

日本婦人

既に「亞細亞之光」を吟じ、今亦た「世界之光」を詠じたる、エドヰン、アーノルド氏が、デイリー、テレグラフ新聞に日本婦人の事を記述せし文に、

あゝ余れ若し詩人ならんか、彫刻家ならんか、此の日本國の美姬が競ひと働らきとの喜びを以て輝やく軟溫たる眼を注して、羽子板の遊びすと云ふ極美の樣を畫き形どるべきものを、其黑く光れる毛、白き齒、滑らかにして象牙の如くなる顏ばせと頸、嬋娟なる絹の衣裳、眩ばゆき帶、美くしき下衣、尋常なる偶なき素足、は喩へば古典にある姬の如く、想像に得る限りの美女の如く、ヲデッセー詩中の玉を尊ぶナウシカアに在も似たり、…ヲ、お辰さん、其ふさ〳〵としたる黑髮よ、流るゝ所ろの眼ざしよ、笑める口元よ、小さき足よ」と。

夫れ日本婦人の賞めらるべき點は此れ丈なりや。日本婦人の粹處は、溫和柔順にして節に臨み毅然懷劍を拔くの處にあり、西洋人何んぞ此の美を見ざる、日本の女は只なよ〳〵としてヲモチヤとなるべきものゝみにはあらざる也。

獨逸の女學

獨逸國は高等女學に尤も熾熱に反對するの國也、左れど時勢の來り漸やく一進化の氣運を兆す、會にベルリンに於ける名の女敎師、ヘレン、ランゲ孃以下の女秀才團體に建議して、女子高等學校の設立を促がし且つ其の敎授を女子に任ぜよと迫

まりたり、然るに國會は遂に之に同意せざりしと云へども今やヒクトリア、ヲレアム校中に高等女學の科を置き私かに之を教授するの會成立ち、始めて一部分の設に移り得たり。

救濟記事

●東京市會

去る三十日午後四時三十分より開會し先づ窮民一時救助の件を議したり同議案は、昨今の米價騰貴に付貧民[illegible]非常の窮境に陷り[illegible]金一萬一千圓を[illegible]目下[illegible]養育院に於て救助[illegible]入院人員[illegible]市參事會に於て[illegible]入院者[illegible][illegible]

廢娼記事

●岐阜

同縣下の廢娼論は頗る[illegible]ありて云く、去る二十日[illegible]大島村長[illegible]會議す[illegible]第一、本縣[illegible]建言[illegible]すこと[illegible]可決したり

●夏季學校

府下に今回の[illegible]志者會合し今月より夏季學校を開く[illegible]

●東京府娼妓

委員諸氏は[illegible]事件にて忙はしく、國會の事務も[illegible]期限したるが本月よりは更に大いに盡力すべき計畫の由。

女報

○皇后陛下の御仁惠 皇后陛下には昨今米價の暴騰にて貧民困難の趣きを聞食され御思召を以て[illegible]の内一ヶ月金三百圓下賜在せられ東京養育院に於て救助方可取扱旨仰出されしに付蜂須賀東京府知事には陛下の御仁惠貫徹す様取扱ふべき旨去る廿四日夫々へ達したりと云ふ。

○女官の寄附金 今般皇后陛下より米價騰貴に付貧民御救恤の御趣意を奉體し宮内省女官よりも左の金額を寄附して東京府知事に其取扱方を依托せられたり 金百圓 高倉壽子、金七十圓 柳原愛子、金六十圓 同[illegible]、金[illegible] 小倉文子、[illegible]

○[illegible]

（六月廿五日中外電報）

○[illegible]六名なりしと云ふ。

○ヲーザ夫人 廿四日[illegible]

○[illegible]の救濟を施す。

●メソジスト[illegible]

週報

○官令 二十四日勅令第百六號にて大藏省官制の改正同百七號にて技手官等俸給改正の件二十六日同百八號にて内務省官制の改正二十七日同百九號にて外務省官制の改正同百十號にて[illegible]官等表中改正の件二十八日法律第四十七號にて明治十八年一月第二號[illegible]中改正の件同四十八號にて行政裁判法[illegible]百十一號にて[illegible]同百十二號にて[illegible]改正同百十三號にて[illegible]同百十四號にて[illegible]公布せらる

○宮廷 二十四日天皇陛下[illegible]へ行幸あらせらる●二十六日天皇陛下山田司法大臣邸へ行幸あらせらる●廿七日天皇陛下[illegible]へ臨幸同日皇太后、皇后兩陛下山田司法大臣邸へ行啓あらせられたり●三十日宮中に於て[illegible]式を行はせらる

○政治 廿四日山縣、西郷、山田、松方、大山、後藤、青木、樺山、芳川、陸奥の各大臣會議して[illegible]を開けり●廿七日山縣、西郷、松方、後藤、青木、芳川、陸奥の七大臣は[illegible]集せり

Digitized by Google
Original from CORNELL UNIVERSITY

鐘が淵紡績會社を觀るの記

此頃二三の新聞紙上に驚ろくべき記事を掲げ、紡績の下に第二の高島炭坑ありなど揚言す、實に聞捨に致さるまじきもの也、苟くも之ありとせば千百の女工の爲めに率先救ふ所ろなかる可らずと覺悟し、間接に樣々の風評を聞かんより直ちに其實況を觀るに若かずと存じて、去一日右會社に趣きぬ、門前には「參觀謝」の三字を掲げたれど、余が來旨を詳びらかにして快よく承引し總べての質問に答へ、又た總べての場所を實見せしめたり。

斯て朝九時より午后二時迄、殘る所ろなく見聞したり、余が新知したる所ろに據れば、世上の風評は悉とく虛聞なるのみか、余は寧ろ同社の注意至らざるなきに感服したり、則はち左に當日聞得たる答辯中の最要點及び實地に觀察したる所ろの一二を記るして、讀者の清鑒を要む。

一。現今同社の工場には、百英斤壓力の蒸氣鑵四箇あり、晝夜運轉して斷えず七百五十馬力の動力を發し、晝も夜も棉綿を紡績して糸を製す、製糸の量日に一万七千斤に上ると云へり、何如に多くの工夫を要するかを知るべし。

二。工夫に男女あり、男は主も力業を爲し、女は旨として紡務に從事す。男工三百五十名。女工一千八百十七名あり。男工は悉とく通勤し一人も寄宿せず。女工を三種に分つ、幼なるものを見習工女と稱し三年を期して奉公す其數二百四十二人、他は日給工女と稱し中に通勤する者九百七十八名、寄宿する者五百九十七名あり。取締の嚴重なるは、工夫を役するの常態なれど、玆には男女の別を嚴密にせんとして殊更に樣々の規則を要するに似たり、此内女工不可入、此内男子不可入、などの札、所々に張つ。

三。雇工誓約書を見るに、見習女工は十三より十八迄の幼女の願出べきものにて皆な三年を約す、證書文には右年限中決て退職相願申間敷とはあれども、職工規則第二十六條に事故あり解傭を乞ふ者は願出後卅日目に許を得云々の項あり、實際何如なる時にも退職しがたきにあらず。日給工夫は男も女も退職隨意なり。總べて退職を壓制拘抑するを得ざるの仕組ゆへ新聞紙上に記する如きとあるべき筈なし、但だ田舍より來りし者は旅費の立替を請ひ置き其金を辨償せざる内は退職しがたきの定めなれども之とても無理に退職する時は保證人代りて辨金するとさふる也。

四。見習女工は三年の間だ、年二度の仕着せを貰ひ、食料を給せられ、月五十錢以上一圓五十錢迄の給料を得。日給工夫は甲乙丙の三等あり、尤高きは日に一圓、尤低きは日に五錢の給料を取る、現に尤も高きは男子にて日に八十錢の者あり、女子にて日に廿二錢の者あり。左れど女子にて廿二錢のは僅かに三人、他は大方、二十錢、十八錢、十六錢の日給を頒す。而して定業の外に餘計に紡績したるものには賞與として夫々の賞金を受く、亦た一ヶ月皆勤の者は日給一日分(但し廿錢以下日給の者は悉とく廿錢)の賞金を受く、三ヶ月皆勤の者は之に倍す。

五。一日勞働時間は十二時間にして間だに五十分の休暇あり、工夫に晝業のものと夜業の者とあれど何れも六時半に始め六時半に終る、共に十二時に至り喫飯す時に卅分の間あり、三時に至り二十分の休あり、但し夜業の分は給料皆な三割増なり。

六。寄宿女工の事尤とも注意すべし。見聞によれば、寄宿舍の室に大小あり一樣ならず、左れど大なるは六十六疊に五十五人を容れたり、即はち概ね一疊一人の割なれども晝夜代る／＼在室するゆへに實は一人二疊の割なり、空氣の流通宜し、各室左程不潔ならず。風呂は朝夕二度あり、六時半出來の後隨意に入浴すべし。入浴の後ち十時迄は隨意の業を爲すを得、別に學校もあれば就て學ぶを得べし。寄宿入舍の女工前述する如く八百三十七人なり、女世話掛五名、男取締一名、小使男女各二名あり、外に洗濯婆二名あり工女は多忙にして自から洗濯すること能はざるにより會社は無料にて洗濯す、看病婦一名、看病世話掛一名あり。各室に室長あり、月一回會議して女工の要求を役員に通ず(同じく工場あり工場會議亦月一回にして職務上の要求を役員に通ず)寄宿女工が外來の人に面會するは十二時より同三十分及び三時より同二十分迄の休暇時間にして其他は面會を許さず、面接所は寄宿舍取締室の隣にあり、余が參りし時にも外來者一名居たりき。休日には朝六時より夜七時迄自由に外出するを許す、若し外泊する時は保證人の證明を要す郵便は往復共に自由なり。此迄新聞紙の言ふ所ろと大相違也。

七、食物は日に七錢五厘の辨當を出す、辨當は會社自ら作出し月々損失ありと云ふ、左もあるべし朝は汁、晝は肴、夜はニシメの出るが、余は此日特更ら晝飯を請ひ喫したり、方一寸五分の閣數、茄子二個、及燒ける鰯の菜にて、米は下の上米なり、尋常の辨當屋の三錢五厘のに同じ、余は炊出所に至り親かに視察するに、此頃は日に二千六百本の辨當を出し、飯は男一日九合女一日四合五勺の定の由、二千六百本の焼出にて一本二錢五厘に當り而も損ありと云へば損と云ふ丈な

Digitized by Google Original from CORNELL UNIVERSITY

信ずべしとするも）食品の粗悪なると大凡は推知すべし。余は知人なきかを案じたり、病室は三ヶ所にて一は避病室と称し[illegible]にあり、されど目下傳染病者一人もなし、衛生上の事は留學生石川瀧二氏外二名の擔當なり、當日病者十六名あり、觀しく見るに皆な重きは無し、居ち醫師より聞くに、今の尤も多き者は消化機病にて二ヶ月患ひ居るもと云ふ、余は脚氣なきやと又十二時間立居るゆへ脚氣及子宮病は無きやと問ひたるに、何れも無しと云へり、但し前入の際呼吸器及腕力は試かに吟味して居ち得すによりて此脚氣病者あらずと也、而して創立より死人未だ一人もあらずと聞く、余は之を信ぜんとす、會社内に出張所あり、病ある者は直ちに會社を乞ひ、或は如何にても目に二銭にて得らる、但し見習工女は[illegible]代無料也、例令ば食料は實費を拂はず、尤も此際の[illegible]に對し賠償の仕[illegible]あり

八、寄宿舍取締は[illegible]名、二百名の女教師あり、當初[illegible]にて有る者に學問を教ゆ、目下就學するもの百二十名、多くは幼者にして尤も幼者の為に出張し[illegible]と聞く、甲乙二級に分ち、日に三時間づつ教授す、[illegible]のに[illegible]習字は[illegible]第三[illegible]以下の手本を用ひ、又小學読本、[illegible]入門[illegible]、[illegible]術は教へ[illegible]、[illegible]夜は[illegible]す、中には[illegible]る由、余は[illegible]に[illegible]じたりなど[illegible]月に三圓乃至十四圓収入の女工は十錢[illegible]へ以上[illegible]に[illegible]、本人より直ちに[illegible]銀行に預く[illegible]あり、[illegible]は本校あり[illegible]

九、[illegible]ぬるを作る余は一時間半見廻りたり[illegible]女工[illegible]働らきを觀て、[illegible]なし、只だ一日立つめは如何にも[illegible]ば之にも[illegible]と見へたり。

十。余は此等の事を見聞し、[illegible]何如にも[illegible]、夫[illegible]に注意せられたるに何故此[illegible]の惡評を受くるやと問へりしに、役員答ふ様、夫は恐らく岩手人の工女よりの事ならんと云へり、蓋し同社に[illegible]最初女工を[illegible]しは、岩手の村田倉次郎氏、村田の[illegible]（[illegible]右衛門）と計り、岩手の女工を東京に出し少しく開化せしめんと企だて、五百名を[illegible]する旨を申し[illegible]へ、[illegible]二十五名を連れ來たり、然るに同社の[illegible]規則を[illegible]く[illegible]に[illegible]の思ひ[illegible]ありしゆみか、此社の事業を以て四京大和などの紡績仕事の如くに心得、高等の女子に[illegible]ふるの真理なりと信じて連れ來りしよしゆへ、中には若手ふる中學校教頭某氏の娘も混じ居たるほどにて意外の女工なりし由、然るに其[illegible]は[illegible]社にて辨じたるをゆへ[illegible]人か[illegible]はざる限り右女工の勤務を要することゝなり、先づ兎に角[illegible]ろうち、第二回の際[illegible]者七十五名外に十七名未だ東京に[illegible]の[illegible]を聞かざるうちに又々出京し來り、入舍の居同じく思ひの外なるを悟り、[illegible]に[illegible]々に申やりたり、此に於て岩手には非常の評判起り、[illegible]、代言人、新聞記者、女工の父兄[illegible]代るゞ[illegible]して出京したるが、[illegible]に同[illegible]の[illegible]を[illegible]して安心し、[illegible]すべきに[illegible]し、止るものは止まることゝなり、出京せる人々も岩手に歸りて[illegible]を[illegible]して[illegible]新聞にも先き[illegible]を[illegible]げて[illegible]を止したるよあり、此間に於て[illegible]の女工は自ら塀へすかして[illegible]走したる者十一名あり、外に[illegible]もの四十名、[illegible]中[illegible]名にて現に三十五名[illegible]り居ると云ふ、此の[illegible]より[illegible]風説を生じたるとにて[illegible]新聞に[illegible]する所[illegible]、[illegible]たるなりと云へり、[illegible]にあらざれば十分に女工を[illegible]する[illegible]なり、[illegible]信[illegible]、[illegible]分の[illegible]なし[illegible]に[illegible]、[illegible]十分に[illegible]工の[illegible]と[illegible]、[illegible]となるべし

[illegible]女工の[illegible]は[illegible]べく[illegible]に[illegible]、[illegible]余は同社の如く[illegible]女工を[illegible]きするもの[illegible]世に[illegible]らるゝ[illegible]に思ひ、其[illegible]の[illegible]へらにて女工[illegible]く安心に[illegible]らんを[illegible]む、[illegible]や目下[illegible]女[illegible]の大[illegible]、[illegible]は[illegible]進[illegible]め、女子には[illegible]るに[illegible]には[illegible]の[illegible]に付き、[illegible]の[illegible]を[illegible]へたるものあり、余が今日此會社の事を[illegible]するにて、[illegible]物にてあると[illegible]に出づ、日本[illegible]に[illegible]ふるもの[illegible]らず[illegible]、此社に於ては[illegible]女が[illegible]を[illegible]分けるにして一日に八銭以上十六銭を取るの也、安んぞ此[illegible]日の[illegible]を世上に[illegible]せざるを得んや

余は同社の為に[illegible]、[illegible]各社の新聞記者なし、自由に[illegible]せしめ、[illegible]は[illegible]に[illegible]せしめたるに[illegible]、余は亦た世上の記者[illegible]にも同様の[illegible]を[illegible]の[illegible]に[illegible]して身を投ずるものあるにあらば非常の事也、或は亦た[illegible]の[illegible]、[illegible]く[illegible]すべし、何れにしても[illegible]すべきにあらざる也、[illegible]く行いて[illegible]之を[illegible]すべし。

Digitized by Google
Original from CORNELL UNIVERSITY

東洋英和女學校廣告欄

本校の學期は豫科三箇年本科四箇年にして別に二箇年に渉る高等科の設あり入學生は寄宿生百三十五名通學生百名を限とす毎科受持の敎員孰れも熟達善良あり然して本校の敎授は實に完全なりとの世評を獲んとは本校の希圖する所なり規則書等御入用の御方は校長宛に御照會を乞ふ

麻布區鳥居坂十四番地 東洋英和女學校

廣告

●六合雜誌

第百十四號　明治二十三年六月十七日發行

目錄

◎日本將來の基督敎……横井時雄
◎米國理財學の現況(完)……ドクトル、オフ、フイロソフイー 小野英二郎
◎貯蓄論(完)……文學士 塩川源夫
◎聖書論……山田寅之助
◎作業社會の問題と基督敎……ドクトル、オフ、フヒロソフヒー 北海居士
◎ビスマークの内治策……池本吉治
◎義は國を高ふし罪は民を辱しむ……宮川經輝
◎雜記
社會問題考究の必要○博士カル、フオン、ハーゼ氏○基督敎は何ぞや○廣告○毎月一回刊行

六合雜誌			
定價		前金	
一冊	四十頁以上	金八錢	府ノ内外ニ論セス別ニ郵送料ヲ要スルコトナシ
半ケ年	六冊	金四十三錢	
一ケ年	十二冊	金八十錢	

廣告料	一回限	二回以上
自一行至五行	八錢	七錢
自六行至十五行	七錢	六錢
十六行以上	六錢	五錢

發行所 東京京橋區出雲町一番地 警醒社

井本修三君編

小學作法書

全　定價十錢　郵税二錢　敎師参考用

本書ハ之ヲ廿八章ニ別チ編尾ニハ本邦違警罪中作法ト關係アリテ通常兒童ノ心得可キ要項ヲ載ス且敎授ノ方法及其他ノ要件ハ之ヲ本書中ニ精シク揭ク
本書ハ編者カ多年ノ實撿上得タルトコロノモノヲ材料トシ之ニ英米ノ諸學者ヨリ聞キタルモノヲ交ヘテ編輯セラレタルモノナレハ高尙ニ失セズ醬儀ニ拘セズ兒童等ヲ導キテ禮法ノ門ニ到ラシムルニ適切ナル良書ナリ

發行所 東京京橋區疊町十二番地 學友社
發賣所 東京神田區雉子町三十二番地 團々社書店

船越鼎太郎君著

産婦小兒 攝生法

全一冊　價金十八錢　郵税四錢

右は産婦小兒の養生法を平易なる文章にて何方にも分り易き樣認めたる者なれども所論は一々學理に照して實際を鑑み專ら當今の養生法其道を盡さゞるとを敎へたり故に月經の心得より、妊娠したるか否やを知ると、出産の期日を知る法、妊娠中の養生法、産後の養生法赤子のとりあつかひ、乳を飮まするの間養生法、母の乳を用ひずして子供を育つる法等ことごとく信切に敎へたり世の母たらん人は何卒一冊を座右に置きて撮愛の生子を誤りて取扱ひ玉ふやうのとあからんとを希ふ

發兌 麹町區富士見町二丁目一番地 女學雜誌社

交詢案内 （催促する何れも委細に申來れ 郵券十錢送れ）

●雇ひたき方 （甲）

二一 中働 年齢廿五才にして一ト通り裁縫の出來るものを[illegible]給金にて雇ひ入度處あり

二五 召使 十二才以上の小女にて實直なるものを給料一ヶ月に[illegible]雇入度處あり

二七 小女 年齢十二三才にして少しく[illegible]裁縫の出來る[illegible]無給にて小間使に雇ひ度ものあり

●雇はれたき方 乙

二四 奉公 年齢廿二才にして一ト通り裁縫も[illegible]家事雑務[illegible]中以上の官員方へ中働きに奉公いたし度[illegible]給金に[illegible]上に[illegible]

二五 裁縫 裁縫に熟し[illegible]婦人洋服にて和服にも巧なり學校若しくは[illegible]教師に雇はれたし

二八 奉公 普通小學科卒業[illegible]者に[illegible]年齢十七[illegible]

二九 奉公 年齢十[illegible]歳にて[illegible]普通食料小使仕著[illegible]一切[illegible]時間[illegible]學[illegible]

三五 奉公 年齢十五才[illegible]高等小學卒業[illegible]へ雇はれ度し[illegible]

三六 教師 [illegible]教に雇はれたし[illegible]年齢廿才にして[illegible]

三七 奉公 毎日[illegible]時間[illegible]出來る女學校[illegible]中以上の官員[illegible]御宅へ[illegible]にて雇はれたきもいあり

三八 召使 身元確かなる十三才の小女にて[illegible]內へ小間使に雇はれたし但し餘暇に簡單な教授せらるにて給金に望なし

三九 公奉 年齢十五才にて身元確なるものあり官員の御宅又は堅き御內へ小間使に雇はれたし但し給金なきも大望にてよろし

第二回夏期學校廣告

當校は今五日午後七時半開校式を執行す入校御申越の諸君は校費を納め生徒證を受取らるべし

夏期學校委員

●○脚氣患者諸君よ左の○●

廣告を讀んで世に名灸有るを知り玉はんことを

●官許專門 天下無比 かつけ根切灸點術●

附言 脚症は一二度如何なる重病と雖ども四五度限り全治受合
○灸治効能男女を論せずかつけは勿論腰より下の冷て痛む病に大効ある事受合論より證據實驗あれ○當時拙家近邊に類似の家號名乘る同業者出來たるに付番地家號を御注意の上陸續御來車あれ

京橋區本材木町三丁目二十一番地松屋橋通り

壽福堂

社告

歌題

第二回懸賞和歌募集廣告

我社先きに第一回懸賞和歌を募集し大に世人の注意を惹きぬ世上幾多の淑女諸君が秀詠を寄せられし事は誠に我社の榮のみならず、女學の爲め賀すべき所です、今旦に第二回懸賞歌題を掲げ、愈女界に和歌の隆盛あらん事を計る、願くは世の淑女諸君續々御秀詠を寄せられん事を

○歌題 夏山家 水邊晩凉

○七月二十五日〆切○第一等賞女學生半年分○第二等賞婚姻論一冊○第三等賞猫と鼠一冊○一題につき一人一首に限る○撰者池袋清風大人

明治二十三年七月四日印刷
明治二十三年七月五日出版

東京麹町區富士見町二丁目一番地
發行所 女學雜誌社

編輯兼發行人 東京麹町區富士見町二丁目一番地寄留 巖本善治

印刷人 東京神田區三崎町壹丁目十三番地寄留 森田豐

Digitized by Google

Original from
CORNELL UNIVERSITY

交詢案内

（催促する勿れ委細に申來れ郵券十錢送れ）

●雇ひたき方（甲）

二一	中働	年齢廿五才にして一ト通り裁縫の出來るものを一圓以上の給金にて雇ひ度處あり
二五	召使	十二才以上の小女にて實直なるものを給料一圓にて雇入度處あり
二七	小女	年齢十二三才にして少しづゝ勉强の出來る御宅に無給にて小間使に雇ひ度ものあり

●雇はれたき方（乙）

二四	奉公	年齢廿二才にして一と通り裁縫もいたし氣輕の生れつきにて華族樣か中以上の官員方へ中働きに奉公いたし度し給金は壹圓以上に願ひたし
二五	裁縫	裁縫は重もに婦人洋服にて和服にも巧なり學校若しくは華族其他高貴の御内に教師に雇れたし
二八	奉公	普通小學科卒業の者にて（年齢二十二才）産婆業を營まるゝ基督信徒の家に無給にて雇はれ餘暇に産婆術を學び度ものあり
二九	奉公	年齢十四歳にて基督教信徒の家（可成は西洋人）に雇はれ度ものあり尤も普通食料小使仕着等一切持參致すに付き毎日四五時間英語學の修業致したし
三五	奉公	年齢十五才の高等小學卒業生にして餘暇に勉學の出來候御宅へ雇はれ度ものあり但し給料は望みなし
三六	教師	數寄屋橋内東京唱歌會卒業生にして何れの學校にても唱歌の教師に雇はれたし但し年齢廿才にして給料は何程にても宜し
三七	奉公	毎日三四時間勉强の出來る女學校又は中以上の官員の御宅へ無給にて雇はれたきものあり
三八	召使	身元慥かなる十三才の小女にして堅き御内へ小間使に雇はれたし但し餘暇に算筆を教授せらるれば給金に望なし
三九	公奉	年齢十五才にて身元慥なるものあり官員の御宅又は堅き御内へ小間使に雇はれたし但し給金は先樣次第にてよろし

第一回夏期學校廣告

當校は今五日午後七時半開校式を執行す入校御申越の諸君は校費を納め生徒證を受取らるべし

夏期學校委員

●○脚氣患者諸君よ左の○●

廣告を讀んで世に名灸有るを知り玉はんことを

官許專門
天下無比 かつけ根切灸點術

附言輕症は一二度如何なる重病と雖ども四五度限り全治受合
○灸治効能男女を論せずかつけは勿論腰より下の冷て痛む病に大効ある事受合論より證據實驗あれ○當時拙家近邊に類似の家號名乘る同業者出來たるに付番地家號篤と御注意の上陸續御來車あれ

京橋區本材木町三丁目
二十一番地松屋橋通り
壽福堂

社告

歌題

第一回懸賞和歌募集廣告

我社先きに第一回懸賞和歌を募集し大に世人の注意を惹きぬ世上幾多の淑女諸君が秀詠を寄せられし事は誠に我社の榮のみならず、女學の爲め賀すべき所とす、今更に第二回懸賞歌題を掲け、愈女界に和歌の隆盛あらん事を計る、願くは世の淑女諸君續々御秀詠を寄せられん事を

○歌題　夏山家　水邊晩凉
○七月二十五日〆切○第一等賞女學生半年分○第二等賞婚姻論一冊○第三等賞猫と鼠一冊○一題につき一人一首に限る
○撰者池袋清風大人

明治二十三年七月四日印刷
明治二十三年七月五日出版

東京麴町區富士見町二丁目一番地
發行所　女學雜誌社

東京麴町區富士見町二丁目一番地寄留
編輯兼發行人　巖本善治

東京神田區三崎町壹丁目十三番地寄留
印刷人　森田豐

女學雜誌

社説　三日以后。婦人の勢力○日下女子教育の欠點
論説　荒嗛（美芳野舍主人）。○貴奴の弊風再燃せんとするを防ぐべし（大江卓）。
批評　高橋是清氏の報告○山縣伯に與ふるの書○新著百種○江戸むらさき
雑錄　養育院を見舞ふの記○犬ころしの情けあきを惘れむ○歌のよみ方○跡見花蹊女史を訪ふの記（生野ふみ）○懸賞答文○きよめぬ庭
小説　うき（六）
寄書　避暑地案内（K、M、生）
開書　清水豊女史に與ふ（青井榮子）○浮世の筆者に與ふ○交詢
時事　三日后の癲狂者○新聞紙上の餘裕○貧民學校○婦人矯風會教育部○夏季學校近づく○新同志社校長に語を寄す○押川方義君○明治學院○邪統惡義○警察署、藝妓、藝妓代女學生○救濟記事○廢娼記事
女報　貴婦人の救恤○慈善音樂會○婦人矯風會○工女の不捌け○今治婦人會○ルマニヤ女皇○ラマバイ女史

More things are wrought by prayer than this world dreams of.--Tennyson.

以后三日女性の勢力

日下内君眞人を助くるの心得

跡見花蹊女史を訪ふ

養育院の沿革及實況

同志者、明治學院、及夏季學校

押川方義小崎弘道君

六月廿八日發兌　第二百十九號　一冊定價六錢

Digitized by Google
Original from
CORNELL UNIVERSITY